

# 森將軍塚古墳

保存整備事業第8年次発掘調査概報

1988

長野県更埴市教育委員会

# 森將軍塚古墳

——保存整備事業第8年次発掘調査概報——

昭和63年度

長野県更埴市教育委員会



# 序

本年度の史跡森將軍塚古墳保存整備事業は、長年の懸案でありました古墳直下の崖の防災工事が、長野地方事務所並びに更埴建設事務所の御援助をいただき完成することができました。また、史跡内の見学路や周辺小古墳の整備が新たに始まり、本事業も完成が一步一步近づいてまいりました。これも国・県をはじめ、多くの方々の御指導・御協力の賜ものと深甚なる感謝を申し上げます。次第であります。

一方、昭和56年度から継続実施してまいりました発掘調査は、来年度古墳本体復原工事に伴う調査を残すのみとなり、本概報も第8冊をもって終刊いたします。これまでの、岩崎卓也調査団長はじめ、調査団関係者の献身的な御努力に対して敬意を表すると共に、正式報告書作成に向けてさらなる御協力をお願い申し上げます。次第であります。

最後に、本事業を計画し推進してまいりました稲玉貞雄前市長が、完成を目前にして病氣療養のため辞任されましたことは誠に残念でなりません。

私も微力ながら本事業の完成に向けて努力してまいりますので、これまで以上の御指導並びに御協力を賜りますようお願い申し上げます。次第であります。

平成元年3月6日

更埴市長 宮坂博敏

目次	例言
I 保存整備事業の概要	1. 本書は、史跡森將軍塚古墳保存整備事業
1. 事業計画の概要	1 (10箇年計画)の第8年次の発掘調査並び
2. 保存整備工事の概要	2 に、整備工事の概要報告書である。
II 発掘調査の概要	2. 本書は、関係者が分担して執筆し、執筆
1. 調査日誌	4 者名を文末に記してある。また十分な検討、
2. 周辺の小古墳の調査	5 調査が進まない途中でまとめたものであり、
(1)12号墳	6 今後の調査、検討により修正を必要とする
(2)13号墳	10 部分もあることを、予めお断りしておく。
(3)14号墳	14
(4)15号墳	21
(5)4号墓石	22
3. 小形埋葬施設の調査	24
4. 埴輪の整理調査	26
5. まとめ	29
関係者一覧	32
図版	

※表紙写真  
完成まじかの史跡森將軍塚古墳  
平成元年3月撮影

# I 保存整備事業の概要

## 1 事業計画の概要

史跡森將軍塚古墳保存整備事業は、国庫（50%）並びに県費（15%）補助事業として、更埴市が昭和56年度から5箇年計画として実施してきたが、諸般の事情により10箇年計画に変更し進めているものである。古墳は全面発掘調査に基づき、築造当時の姿に正しく復元整備を行うとともに、便益施設、古墳直下の崖の防災工事などの史跡内環境整備をも実施し、史跡公園として広く一般に公開する中で、古墳の保存を図ることを目的としている。

事業計画の策定・実施にあたっては、文化庁・奈良国立文化財研究所・長野県教育委員会の指導を受け、また各分野の専門家による“史跡森將軍塚古墳保存整備委員会”の検討も仰いでいる。発掘調査は、“史跡森將軍塚古墳発掘調査団”を編成し実施している。

本年度の事業は、昨年引き続き古墳直下の崖の防災工事を実施し、これを完了した。また新たに、史跡内整備工事に着手した。一方、古墳本体復元工事は、史跡内整備工事の円滑化と、仮設経費の軽減を図るべく、再度中断した。したがって発掘調査も、周辺部の小古墳等5基を対象として実施し、整備事業に伴う周辺部の調査を完了した。

整備委員会は、3回開催した。史跡内整備工事の着手に伴い、見学路の位置・仕様について現地に丁張を設け、具体的な検討がなされた。また、周辺の小形埋葬施設群及び小古墳の保存方法・表示方法について再三検討され、これらの規模・構造に不明な点が多いことも考慮に入れ、一部の公開にとどめ、その多くは埋め戻し保存することとなった。しかし、その表示方法については、意見の一致をみるには至らなかった。

来年度は、古墳本体復元工事の完成を図り、併せて史跡内整備工事を引き続き実施する予定である。

また、古墳本体復元工事に伴い、墳丘解体工事に併せ墳丘内石積み等の調査が8月から9月にかけて計画されており、現場における発掘調査は全て完了する予定である。

なお、昭和56年度の第1冊から刊行されてきた概報の刊行は、第8冊の本概報を最後に、来年度からは本報告の刊行に向け、新たに報告書刊行小委員会を設け、作業に取り掛かることも計画している。

全体事業計画及び経過

年次	年 度	事業費 (千円)	事 業 内 容
1	昭和56年度	23,000	予備発掘調査 史跡内地形測量(1/100)・史跡内土地公有化
2	昭和57年度	20,000	前方部発掘調査 整備工事(完全掘50m・土留えん堤50m)
3	昭和58年度	50,000	後円部発掘調査 後円部石室保存工事・復元工事計画策定
4	昭和59年度	40,000	墳丘解体工事に伴う調査 本体復元工事実施設計・後円部復元工事(291m <sup>2</sup> ) 周辺円墳発掘調査
5	昭和60年度	55,000	墳丘解体工事に伴う調査 後円部復元工事(1,149m <sup>2</sup> )
6	昭和61年度	55,000	墳丘解体工事に伴う調査 後円部復元工事完了(539m <sup>2</sup> ) 周辺円墳発掘調査 前方部復元工事着手(352.2m <sup>2</sup> )
7	昭和62年度	60,000	周辺円墳発掘調査 古墳直下崖防災工事
8	昭和63年度	60,000	周辺円墳発掘調査 史跡内整備工事着手 古墳直下崖防災工事完了
9	平成元年度	—	墳丘解体工事に伴う調査 前方部復元工事完了(古墳本体復元工事完了) 史跡内整備工事
10	平成2年度	—	整理調査 史跡内整備工事完了 発掘調査報告書刊行 整備工事報告書刊行

## 2 保存整備工事の概要

本年度の保存整備工事は、昨年度に引き続き古墳本体復原工事を再度中断し、古墳直下の崖（2号崩壊地）の防災工事を実施した。本年度工事により2号崩壊地防災工事は完了し、地肌をむき出しにしていた崖は、現在緑化され青々と草が茂っている。また、長野地方事務所・更地建設事務所によって実施されている周辺の崩壊地の防災工事も計画的に進行中である。

本年度から新たに、見学者・貼石帯設置・小古墳整備などの工事に始まる史跡内整備工事に着手し、本事業も最終段階へと進展してきた。

**防災工事** 本年度工事は昨年度に引き続き実施するものであるから、工事発注は、4月28日契約と早い着工をした。工事は、盛土斜面に現場打ちコンクリート法枠の設置と、種子吹付のみであった。工事仕様は、昨年度工事と同じものであった。ところが、6月に入り昨年度打設したコンクリート法枠の縦梁14ヶ所・横梁30ヶ所に圧縮による亀裂が発生した。また法枠上部では、盛土の沈下に伴い法枠と盛土との間に10～33cm程の空隙も生じた。破損の原因は、雨水により急速に盛土土砂の圧密沈下が起こったものである。法枠は、主アンカー・補助アンカーにより盛土土砂に固定されているので、盛土土砂の圧密沈下に伴いアンカーを通して法枠本体に圧縮応力として作用し、破損したものである。

対応策として、法枠下部5段目附近まで縦梁1本おきに断面を20cmから30cmに広げ補強し、破損部分は取り除き改めてコンクリートを充填した。また法枠上部の空隙部分には砂を充填した。本年度工事部分についても同様な仕様に変更し、盛土最上部の法枠の施工を2m程下方で止め、今後盛土の沈下が起こっても、盛土面と法枠との間に空隙が生じないように配慮された。なおこの部分には、厚層基材を吹きつけ緑化を図った。さらに、古墳との間に土留溝を設け雨水の流入を防ぐ処置も行った。

**史跡内整備工事実施設計** これまで整備委員会において、史跡内整備方法について検討してきた内容に基づき、史跡内全域の整備工事実施設計書を作成した。史跡内整備は、便益施設・安全施設等の設置を含めた周辺環境を整えて、修理保存される古墳を広く見学者の活用に供そうというものである。そのため、見学者の安全・利用を考慮しつつ、古墳の保存・立地環境の保全を基本に、計画策定並びに実施設計がすすめられた。

古墳本体に伴う整備工事としては、保存上埋戻したため見ることができない石室・墓壇は、その位置・規模がわかる程度の平面的な表示に止めた。地輪列については、復原し並べることになったが、当地方の冬は寒いので、素焼きの地輪は凍上したちまちま破損してしまうと推測されるのでその使用を避け、現在強化プラスチックを含む材質について検討中である。前方部正面の丘尾切断の岩盤面は、露出公開できるよう検討されたが、風化が激しいために盛土芝張りを行うこととなった。後円部墳丘の廻りに巡る貼石帯は、保存状態が悪いので埋戻した上に、復原表示することにした。なお、墳頂部に説明板・安全柵等も設置する計画である。

解体修理される古墳本体に比べて、周辺遺構は盗掘などの破損を受け保存状態が悪く、規模・形状など不明な部分があること、またそれぞれの遺構の構築時期が異なることなどから、原則として埋戻し保存を図ることになった。しかし、小形埋葬施設群は古墳築造時期と異なるが、本古墳の大きな特徴であることから、石積みによる復原整備を行うべきとの意見と、上部構造が不明なものを一様に復原することは、誤った認識を与えることになること、将来の維持管理に心配があることなどの意見があった。こうした意見を踏まえ、説明上代表的なものを数基露出公開し、他は埋戻し保存を図ることとした。同様に小古墳群も埋戻したうえで、古墳の存在がわかる程度の盛土を行い芝張りすること

になった。なお3号墳については、現状に保存盛土を行うと、古墳本体の葺石面が、3号墳の墳丘下に隠れてしまうことから、墳丘上部を解体し石室内部を公開することにした。

見学施設としては、古墳の両側墳麓に見学路をはじめ、見学広場・安全柵・階段・説明案内板・便所等を設け、見学者の利用に供することが計画された。

**史跡内整備工事** 本年度の整備工事は、今後の工事を勘案して後円部東側墳麓の工事から着手した。これは瘦根上であるため、取り付け道路から遠方部の工事を仕上げてくる方が施工性が良いこと、また仮設経費の節減になり経済性も良いことから実施した。

まず古墳東側墳麓斜面に、資材搬入路を兼ねて見学路工事が行われた。見学路は、尾根上部から墳麓を通り尾根下部の2号墳へ続く、幅約2m・延長120mの歩道である。急傾斜面となる前方部側の71mは、コンクリートブロック積み擁壁、残りは盛土により設けた。見学路の位置は、現地に丁張を設定し、整備委員会の現地立会指導を得て、景観上コンクリート擁壁があまり目立たないようにして、地形と古墳との関係から位置を決定した。しかし前方部の先端付近では、地形上擁壁は4.5mと高いものとなった。見学路表面は、周囲の景観に馴染むよう、黄褐色砂質土とセメントを混合したソイルセメント舗装されることになっている。

遺構の保存盛土及び、整備盛土工事にあたっては、発掘調査を実施した遺構の保護のために土のうが敷き詰められている現況面に、10～100cm程礫質土による盛土を行った。芝張り部分については、さらに10cm程の良質土を盛土し、野芝を張った。小古墳の保存盛土は、古墳の存在がわかる程度ということで、50～100cm程の盛土を行った。

貼石帯の復元工事は、土のう上に15cm程の保存盛土を行い、5～10cm程のコンクリート基礎を打設した。後円部東側は、急傾斜面となっているのでコンクリート擁壁を5箇所設け、コンクリート基礎のずれを防ぐ処置をとった。コンクリート基礎上に5～10cm程のモルタルを敷き、石英斑岩小角礫を並べ、石を固定した。またモルタルが乾く前に、黄褐色砂質土をフルイにより2～3mm程モルタル面に付着させ、モルタルが見えないようにも工夫した。

階段工事は、前方部東側の前方部頂へ登る石積み階段に合わせ、見学路からの階段を設けた。また、丘尾切断部が崩状になっているので、尾根上部から見学路への階段も設けた。いずれもコンクリート製のもので、表面仕上げはビシャン叩きを施し仕上げた。

2号墳手前の防護柵設置工事は、スチール製ネットフェンスを設置し、見学者の危険防止を図った。

本年度の史跡内整備工事は、急傾斜面に見学路を設置するにあたり、足場がなく大変な工事となった。また、雑然と並べる貼石帯復元工事も、初めての工事ということで手間取った面もあったが、暖冬のため積雪はなく、順調に工事は進み、古墳東側墳麓の整備工事はほぼ終了した。(矢島宏雄)

#### 本年度工事概要

工 事	設 計 監 理	施 工	工 事 内 容
防 災 工 事	工期 昭和63年4月20日～同年7月30日 設計監理費 1,200,000円 財団法人 長野県建設技術センター	工期 昭和63年4月28日～同年7月30日 工事請負費 21,590,000円 株式会社 北澤組	法枠工 1,419㎡ 厚層基材吹付工 203㎡ 種子吹付工 380㎡
	工期 昭和63年6月7日～同年12月15日 実施設計費 5,000,000円	工期 昭和63年10月15日～平成元年3月28日 工事請負費 27,000,000円 株式会社 北澤組	史跡内整備工事実施設計 貼石帯復元工 202㎡ 小古墳整備工 5基 見学路工 120m 芝張り工 960㎡ 階段工 2基 防護柵工 44m
史 跡 内 整 備 工 事	工期 昭和63年10月15日～平成元年3月28日 設計監理費 700,000円 株式会社 文化財保存計画協会		

## II 発掘調査の概要

### 1 調査日誌

本年度は、史跡内整備計画に基づき最後に残った周辺小古墳の発掘調査を実施した。調査は、前方部側の現場事務所付近の盗掘坑がある部分と、小さな地彫れを中心に行う一方、後円部墳麓の7号墳から6号墳にかけての角礫の散乱した部分について実施した。

8月1日から、まず現場事務所付近の調査に取り掛かった。盗掘坑が残る円墳状の所を、11号墳と呼称し、調査を行ったが、ほとんどが壊れており、構造等確認できなかった。中世墳墓等の遺構ではないかとの疑問が提起されたが、調査時点では古墳として調査が行われた。後の整理調査により古墳ではなく、墳墓として4号集石と改めることとなった。

小さな地彫れは、自然地形であることが確認されたほかに、61号組合式箱形石棺、12号墳と命名した横穴式石室を検出して、この付近の調査を終えた。

一方、後円部墳麓の調査は、第6年次の調査を引き継ぐかたちで、7号墳周辺の調査と尾根の稜線に入れたトレンチを延長することから始めた。トレンチ東端に検出された13号墳は、石棺の一部こそ露出していたが、これまで古墳の存在には気がつかなかったものである。角礫の散乱していた所からは横穴式石室が発見され、刀をはじめ遺物も多数出土したので14号墳と命名し、調査を行った。7号墳周辺は、かつて桑畑として開墾されたためか、新たな遺構は見いだされなかったが、新たにトレンチ内に検出された墳丘の一部を15号墳と命名することにした。他に62号組合式箱形石棺も検出された。

ほぼ全容が明らかとなった9月4日に、現地説明会を開催した。調査は、埋戻し作業が完了した9月10日に終了した。

今回の発掘調査によって、昭和56年から始めた史跡森將軍塚古墳および周辺部の発掘調査は全て終了し、来年度計画している古墳本体復原工事に伴う墳丘解体調査を残すだけとなった。これまでの8年にわたる発掘調査は、調査団はじめ数多くの方々のご指導と協力によって、新知見もあり多大な成果をあげることができた。また、無事故で調査ができたことも、関係各位の協力によるものと感謝したい。

これから、この成果をまとめる段階を迎え、より一層の御指導、御協力を願ってやまない。(矢島宏雄)

### 調査日程

- 4. 28 (防災工事着手)
- 6. 6 (亀裂発生)
- 6. 28 第1回整備委員会開催。
- 7. 29 基準点測量実施。
- 7. 30 (防災工事完了。)
- 8. 1 現場事務所付近から発掘調査を始める。
- 8. 8 7号墳周辺の調査を始める。
- 8. 11 12号墳より鉄線・ガラス小玉など出土。
- 8. 25 14号墳より刀出土。
- 8. 31 13号墳より刀・鉄線出土。
- 9. 4 現地説明会開催。100名程の見学者が訪れる。
- 9. 5 12号墳埋めもとし完了。
- 9. 10 14号墳埋めもとし完了  
本年度発掘調査終了。
- 9. 19 文化庁へ進行状況説明に上京。
- 9. 29 第2回整備委員会開催。
- 10. 4～ 東京国立博物館「日本の考古学」展に地輪展示。
- 11. 13 (史跡内整備工事着手。)
- 11. 2 (周辺防災対策会開催。)
- 11. 9 奈良国立文化財研究所工楽普通氏視察。
- 12. 2 第3回整備委員会開催。

調査日数 35日 (内1.5日雨天中止)

調査面積 約300㎡

調査団員 延べ159人

調査参加者 延べ180人

※1年次～8年次延べ

調査日数 延べ644日

調査団員 延べ3,600人

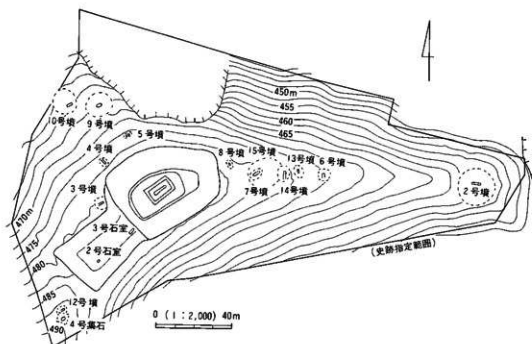
調査参加者 延べ6,170人

## 2 周辺の小古墳の調査

周辺の小古墳の発掘調査は、史跡内整備に併せ位置・規模・保存状態並びに古墳の内容等を調査し、森將軍塚古墳と共に保存を図ることを目的に計画・実施された。今回の発掘調査により、現在知られる史跡内全域の小古墳の発掘調査は終了した。当初2号墳・くびれ部古墳（3号墳）を含めて6基程の小古墳の存在が予想されていたが、小さな地形の変化などに注意して実施した調査によって、その数は13基となった。史跡内整備に伴い、史跡内いたる所に土まんじゅう状の盛土芝張りをした古墳保存工事が行われることとなった。

今回の調査は、前方部側の現場事務所付近と、後円部墳麓の7号墳から6号墳にかけて実施した。明らかに古墳と考えられる所が2箇所程あり、当初2基の調査を予定していたが、発掘が進むに従って新たに3基の小古墳を検出し、小古墳4基、集石1基、組合式箱形石棺2基の調査となった。

これまで調査を実施した古墳以外にも、2号墳先端の採石により切り崩されてしまった尾根部分にも小古墳が存在したことが採石前の写真や、出土遺物から知ることができる。また森將軍塚古墳の北西側の採石によって切り崩された尾根部分にも存在したものと考えられ、かなりの数の小古墳が存在したものと推測される。こうした状況は、近くの倉科將軍塚古墳や、対岸の川柳將軍塚古墳にも観られることが指摘されているが、調査が行われていない現段階では、実態は不明である。（矢島宏雄）



挿図1 周辺小古墳分布図



## (1)12号墳

森將軍塚古墳の前方部前面から瘦尾根が、西南方向に高さを増しながら連なっている。この尾根は、元来はより東北方に延びていたが、森將軍塚古墳の前方部築成に際して切断され、またその先は墳丘の一部と化している。12号墳は、この尾根の切断部からやや南寄りの傾斜面上に位置する。本古墳はすぐ南側にある平安～鎌倉時代の墳墓と想定される4号集石の封土下から検出された。また、12号墳の東南約3mの位置には61号石棺が位置している。

### 1. 墳丘 (図版1)

墳丘は、ほぼ完全に流出してしまっていた。そのため、墳形・外部施設については明らかにし得なかった。

### 2. 主体部 (図版2)

主体部は、主軸をS-71°-Wとする無袖の横穴式石室である。開口部は崩壊しているが、現存長は230cm、床面での内法の幅は、奥壁で56cm、中央部で70cm、羨道端部で60cmである。従って、その平面形はやや胴張りの長方形を呈する。

石室の上半部は崩壊が著しいため、石室構造は完全には明らかでない。奥壁は1段のみ、床面から25cmまで残存している。また、側壁の石積みは、残りの良い南壁で最高4段、床面から50cmまで残存している。奥・側壁は、幅約30～50cm、奥行き約20～35cm、高さ約20～35cmの割石を平積みにして構築されており、その間隙には小礫が充填されている。側壁の石の積み方はあまり丁寧ではなく、特に南壁では、内法面はかなりの食い違いを見せる。両側壁の背後には、若干量の石材が置かれているが、特に裏込めというほどの量ではない。

石室の床面は、奥壁から180cmの所までは板石を敷きつめ、その間隙に小礫を充填しているが、その他の部分には小礫のみが敷きつめられている。そして、この小礫敷きの上にはかなり大形の礫が置かれており、これらの礫は羨道閉塞石であると考えられる。無袖式に属する当石室の玄室と羨道とは、床面の使用石材の違いと閉塞石の存在によって区別できる。なお、石室床面は、南側壁側から北側壁側に向かってやや下降している。

石室の天井の構造については、崩壊してしまっているため明らかにし得なかった。ただし、天井石となり得るような大形の石材は検出できず、元来、天井の被覆には石材は用いられていなかった可能性がある。

本石室は、墓壇内に構築されている。墓壇は、岩盤を掘り込んで形成されており、その規模は現在確認できる最上面で長さ230cm以上、幅155cmである。石室壁体と墓壇法面との間には、暗褐色土が墓壇内埋土として充填されている。墓壇底面は、石室主軸方向ではほぼ水平であるが、横断面方向では尾根に従ってかなり傾斜しており、石室床面に見られる傾斜もこの墓壇底の傾斜によるものと思われる。

遺物は、石室内埋土からは埴輪片が、石室床面からは鐔・繩・鉄鍬・耳環、土玉・ガラス製小玉が出土した。床面上で出土した遺物は、玄室の奥壁寄りと羨道寄りの2ヶ所に集中しているところからして、2体の埋葬も考えられる。ただし、石室の床面は1枚しか存在しなかった。

12号墳の横穴式石室は閉塞石が残存しており、石室上半部は崩壊していたものの、それらの石材は石室内に大量に落ち込んでいる。また、床面遺物の多くも原位置を保っていることから、中心部付近に若干の擾乱があったにせよ、盗掘はほとんど受けていないものと考えられる。(岩崎充宏)

### 3. 出土遺物

鉄製品、耳環、玉類がある。すべて石室内から出土し、石室外、墳丘からは出土しなかった。遺物は、石室の奥壁寄りと開口部寄りの2つのグループに分かれて出土した。両者間には約1mにわたる空間があり、この空間にはガラス製小玉3個が散らばっていたにすぎない。奥壁寄りのグループは、土玉約30個、鐔・鉾各1個、鉄鍔3本からなる。鐔と鉾は組み合うものと考えられるが、鐔は右側壁に、鉾は左側壁にそれぞれ接して出土している。刀身そのものは出土しなかったが、埋土中に多量の鉄片が含まれており、錆化した刀から剥落したものと考えられる。開口部寄りのグループは、ガラス製小玉約60個、耳環2個からなる。耳環は対をなし、隣り合って出土した。

遺物はすべて敷石直上、あるいは敷石間にあつて、ほぼ原位置を保つものと考えられる。また、石室内には多量の角礫が落ち込んでおり、石室上部の崩壊にともなって堆積したと思われる。したがって後世の擾乱を受けた形跡は乏しいが、鐔と鉾を伴うべき刀の出土がなく、刀から剥落したと思われる鉄片だけが見られたことは不自然であり、やはり刀身が相当に傷んだ頃、つまりかなり後の世に一部に擾乱を被っていたものと判断せざるをえない。なお、落ちこんでいた角礫に混じって埴輪片4点が出土している。

鉄製品(挿図2-1~5) 鐔1個、鉾1個、鉄鍔3本がある。

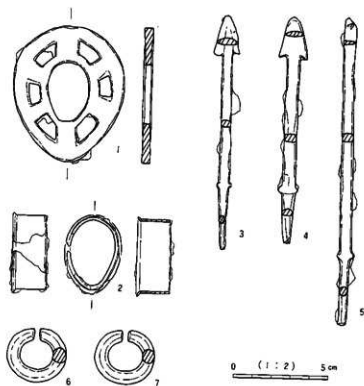
鐔(1)は銅卵形を呈し、長径7.1cm、短径5.8cm、厚さ0.5cmである。中央部の孔は外形と相似形をなし、長径3.1cm、短径2.1cmを測る。ほぼ方形の窓を6ヶ所に穿つ。

鉾(2)は長さ1.8cm、内側で長径3.4cm、短径2.3cmである。厚さ1.5mm前後の鉄板を曲げて縫ぎ合わせ、前端を3mmほど外側に折り曲げている。

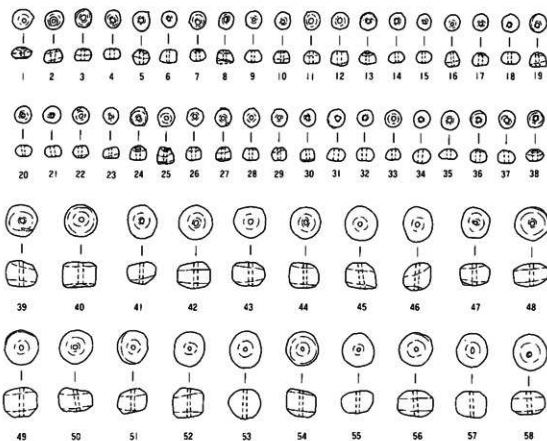
3-5は鉄鍔である。3は全長12.2cm、鍔身部長2.0cm、鍔身部幅1.4cmを測る長頸鍔である。鍔身部は長三角形をなし、短い逆刺がある。片丸造りで鍔莖被を有する。4は3と同形で全長11.7cm、鍔身部長2.1cm、鍔身部幅1.5cmを測る。

5は残存長16.0cmの長頸鍔である。片刃箱式で、鍔身部の関はない。平刃造りと思われる。鍔莖被を有する。

耳環(挿図2-6・7) 断面円形の銅胎を銀で覆ったものである。銀灰~銀黒色で、やや金色がかかる部分があることから、金鍍金の可能性がある(註1)。6は長径3.1cm、短径2.8cm、断面径0.8cm、7は長径3.2cm、短径2.8cm、断面径0.7cmを測る。



挿図2 12号墳 鉄製品・耳環



(1:1)

挿図3 12号墳 玉類

玉類(挿図3) ガラス製小玉69個、土玉35個がある。1～38はガラス製小玉で、色調はすべて紺色半透明である。形状はおおむね扁平な球形を呈し、大きさもほぼ揃っている。直径4.2～5.1mm、厚さ2.6～4.2mm、孔径0.6～2.0mmを測り、平均値は直径4.7mm、厚さ3.2mm、孔径1.0mmである。内部には大小の気泡が認められるが、肉眼では気泡列は観察できない。また、表面に小さな突起を認めるものがある。

39～58は土玉である。いずれも表面は漆黒色、断面を知りうるものは淡赤褐色を呈する。形状はおおむね扁平な球形をなすが、あたかも管を切断したかのような形状をなすものもある。また、上下端に浅い凹面を有するものが認められる。大きさは直径7.85～9.95mm、厚さ5.90～7.60mm、孔径0.70～1.10mmを測り、平均値は直径8.5mm、厚さ6.8mm、孔径0.9mmである。半光沢を有し、黒塗りりの可能性がある。また、薄く剥落した部分の状態からみて、重ね塗りが行われたようである。

#### 4. まとめ

12号墳は墳丘の大半が流出し、調査前にはまったく注意されていなかった。今回、4号集石の調査にともなってその存在が明らかになり、内法の長さ約2m、幅60～70cm前後の小規模な横穴式石室を内部構造とする古墳であることが判明した。

石室内の遺物は奥壁寄りと開口部寄りの2つのグループに分かれて出土した。開口部寄りのグループはガラス製小玉を主体とし、耳環1対を伴っている。このことから、開口部側すなわち西に頭を向けた被葬者の存在を想定することができる。一方、奥壁寄りのグループは土玉を主体としているが、これを首玉とみるならば、奥壁側すなわち東に頭を向けたいま1体の被葬者を想定することができる。

したがって、少なくとも2体の被葬者が互いに頭位を逆にして埋葬されていた可能性があり、むろん追葬が行われたことも考えられる。

土器の出土がないので、築造年代については副葬品の年代観、石室の構造から類推するほかない。まず、副葬品のうち六窓鐺は八窓鐺よりも後出し、TK209型式併行期に出現するとされている<sup>(註2)</sup>。鉄鏃は長頸鎌筈被脇片丸造長三角形式と長頸鎌筈被平刃造片刃箭式のセットである。このうち片刃箭式のものは平刃造りとみられるが、すでに鏃身関節部が消失し、この種のものの末期形態である<sup>(註3)</sup>。矢柄から外に出る部分の長さが12cmを超え、長頸化が著しい点も新しい要素である。

石室は小型化が進行し、横穴式石室のうちではもっとも後出するタイプのひとつである。これに類似した小形の横穴式石室は、県下では松本市安塚古墳群<sup>(註4)</sup>、秋葉原遺跡<sup>(註5)</sup>、岡谷市大久保B遺跡<sup>(註6)</sup>などで発見されている。安塚古墳群例は構造の詳細が明らかでないが、秋葉原遺跡で検出された2基の小横穴式石室のうち、3号墳は長さ2.2m、幅0.5~0.7mで、奥壁1段、側壁2段を遺存する。また大久保B遺跡1・2号墳墓はともに奥壁1段、側壁2~3段の壁面構成で、長さ約2m、幅0.45~0.8mを測る。大久保B遺跡例はわずかな胴張りを有し、敷石をもつ点なども12号墳石室ときわめてよく似ている。築造年代についてみると、安塚、秋葉原例はともに出土した須恵器から早くとも7世紀後半以降の所産であり、大久保B遺跡2号墳墓は出土した八花鏡から奈良時代の早い頃に遡るものではないとされている。近県では静岡、東京などに類例をみるが、やはり7世紀前半に遡るものはない。以上の諸例は多少の形態差があるものの、小型化を遂げている点で共通性をもつ。したがって、12号墳石室の年代もまたこれらと大きく隔たるとは考えられない。以上のことから12号墳の築造年代は7世紀前半を上限とし、それを大きく下らない頃としておきたい。(岡林孝作)

#### 註

- (1) 永嶋正泰 「耳環の素材と製作技法について」『井上コレクション発生・古墳時代資料図録』小川貴司編 1988年
- (2) 白杵熊氏の御教示による。
- (3) 岡 義則 「古墳時代後期鉄鏃の分類と編年」『日本古代文化研究』第3号 古墳文化研究会 1986年
- (4) 長野県中信土地改良事務所・松本市教育委員会 『松本市新村安塚古墳群』 1979年
- (5) 長野県中信土地改良事務所・松本市教育委員会 『松本市新村秋葉原遺跡』 1983年
- (6) 長野県埋蔵文化財センター 「中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書1」 1987年

## (2)13号墳

13号墳は、森將軍塚古墳後円部の東側約35m、2号墳に向かってのびる尾根上に位置する。6号墳の西方約10m、14号墳の東側に隣接する地点である(図版3)。ここにわずかな地影れが存在することは注意されていたが、古墳か否かは明らかでなかった。今回、遺構の有無を確認するために、尾根頂部に設けたトレンチを延長したところ、石棺<sup>(註1)</sup>が検出され、古墳であることが判明した。そこで、墳丘・主体部の構造、築造年代などを明らかにするために、主体部内の調査、および、墳丘のトレンチ調査をおこなった。

### 1. 墳丘(図版4)

13号墳は、石棺を内部構造とする円墳である。墳丘の平面形は、石棺の主軸方向に長い楕円形をなし、南北約7m、東西約6mを測る。墳頂の高さは現状で標高約474.8mである。

尾根の頂部に設けたトレンチ(第2・第3トレンチ)、およびこれに斜交して、北東方向に設けたトレンチ(第1トレンチ)で、それぞれ墳端を確認した。自然地形は西から東に向かって傾斜しており、墳丘もその影響を受け、墳端の高さは一定ではない。墳端の標高は西側で約474.6m、北東側で約473.9m、東側で約474.1mである。現状での墳丘の高さは、西側で約20cm、もっとも高く見える東側でも約70cmにすぎない。封土の流失を考慮しても、築造当初からそれほど高かったとは考えられず、石棺を覆う程度の低平なものであったと推定される。

墳端は地山削り出しによるテラスをめぐらす、西側では浅い堀割を設けて区画している。テラスの幅は一定せず、第1トレンチでは約1.5m、第2トレンチでは約20cmである。堀割の幅は約2m、深さは30~40cm前後である。墓石、埴輪は認められない。

各トレンチでの土層観察によると、墳丘は尾根上のわずかな平坦部を利用しながら、大半を盛土によって形成されている。まず尾根の高い側を堀割によって切断するとともに、低い側にはL字形カッティングによるテラスを設け、墳域を区画する。その後、石棺の西側に相当する部分の岩盤をけずり、地山面を平坦にする努力を行っているようである。このために、石棺の東側では岩盤上に薄く堆積した黒褐色の旧表土を認めるのに対し、西側では認められない。石棺は岩盤上面から掘り込まれた浅い墓壕内に設置され、これを覆う盛土をおこなって墳丘を完成している。したがって、石棺は盛土後に掘り込んだ墓壕をもたない。

なお、第3トレンチでの土層観察によると、13号墳の堀割に堆積した覆土は、14号墳東側の堀割によって切られている。13号墳堀割の底面と14号墳のそれとの間に堆積した覆土の厚さは、堀割の中央部付近で20cmほどである。したがって13号墳は14号墳に先行し、両者間には一定の時間的間隔があったと考えられる。

### 2. 主体部(図版5)

13号墳の主体部は主軸をN-15°-Eにとる石棺である。すでに述べたように、石棺は岩盤上面から掘り込まれた浅い墓壕内に設置されている。墓壕の平面形は未調査のため明らかではないが、第2・第3トレンチで上幅約0.9m、深さ10~15cm前後を測る。側壁および床面の敷石は墓壕底の岩盤直上に置かれている。

石棺の内法の大きさは、主軸上での長さ1.92m、中央部の幅0.47mを測る。長側壁は石英斑岩角礫および石英閃緑岩板石を3段小口積みしているが、東壁の一部には4段目の石材が遺存している。床面から上端までの高さは約0.5mである。短側壁は石英閃緑岩の板石各1枚を立てるが、長側壁の状態

からみて、その上にさらに1～2段の石材を平積みしたものと考えられる。天井石はまったく遺存しない。また、内部に落ち込んでいた角礫に天井石と考える石材はみられない。

床面には石英閃緑岩の板石を一面に敷き詰め、間隙に3～5cm大の小円礫を充填している。同様の小円礫は石棺埋土中に多く混入し、北小口側の表土中では1.5×1m程度の範囲に集中的に散布していた。これは盗掘者が石棺内部の土砂を主として石棺の北側に排出したことを示すとともに、その量からみて床面の板石敷上に小円礫による床面が存在したことも推定される。

四壁の周囲には角礫による控え積みが認められる。控え積みの平面形は、上部で南北約3m、東西約2mの隅丸長方形をなす。第2・第3トレンチの所見では、控え積みは内側ほど大きめの角礫を密に配し、外側では小さめの角礫と土を混合して積んでいるようである。控え積みの末端は墓壇外におよび、第2・第3トレンチ上で幅約2.5mを測る。

### 3. 出土遺物

今回の調査で出土した遺物は、直刀1口、鉄鏃12本、土玉3個、白玉1個、土師器壺形土器1個である。土師器は墳丘北西側テラス上から、それ以外の遺物は石棺内から出土した。石棺内はすでに後世の擾乱を受け、遺物は散乱した状態で出土しているが、個々の遺物の遺存状態は比較的良好である。

**直刀 (挿図4)** 鉄製で、全長67.0cm、刀身長55.0cm、茎長12.0cmを測る。刀身は平造で、切先はふくらを有する。片間で、やや斜めに0.5cmほど切れ込んでいる。茎の幅は間から徐々に減じ、1/4付近から茎尻にかけてはほぼ一定である。目釘孔は茎の中程と茎尻近くに各1孔認められる。茎には木質が付着しているが、関節より約2cmの間には木質の遺存を認めない。この部分にはわずかながら鹿角と思える有機物が付着しており、鹿角製の把縁装具を装着していたものと考えられる。

**鉄鏃 (挿図5)** 鉄鏃は破片を含めて12本分が出土している。ここでは全体の形状を知りうる10本について図示した。全て莖被を有する長頸鏃で、柳葉式と片刃箭式がある。

1～7は、莖被片丸造柳葉式であるが、細部のつくりの違いから3種類に分類することができる。

1は鏃身が比較的小さく、わずかに段をなす直角闊を有する。残存長16.1cm、鏃身部長3.0cm、鏃身部幅0.9cmを測る。

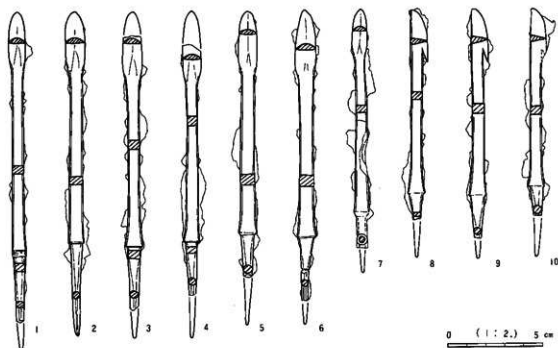
2～6は鏃身が比較的大きく、台形闊を有する。2のみ完形で、全長16.8cm、鏃身部長3.2cm、鏃身部幅1.0cmを測る。他のものも若干の大小の差はあるが、同様の大きさのものである。ただ、5・6はやや短く、柄部もやや厚い。

7は1～6に較べて小さく、細身である。残存長12.4cm、鏃身部長2.4cm、鏃身部幅0.8cmを測る。

8～10は、莖被平刃造片刃箭式である。切先はふくらを有し、鏃身全体の約1/4程度の長さの逆刺を有する。台形闊を有する。9は残存長11.8cm、鏃身部長2.7cm、鏃身部幅0.9cmを測る。なお、10はX線写真によっても逆刺を確認できないが、8・9とはほぼ同形同大であり、本来逆刺を有したものが欠損したものと考えておきたい(註2)。



挿図4  
13号墳 直刀



挿図5 13号墳 鐵鏃

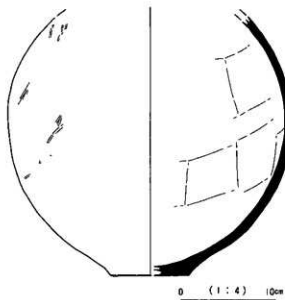
玉頭 土玉は12号墳・14号墳などで出土したものと同様のもので、径1cm、厚さ0.7cm前後のものが3個ある。黒灰色～漆黒色を呈する。白玉は滑石製で、径3.95mm、厚さ2.45mmを測る。

土師器(挿図6) 墳丘北西側の墳端テラスの直上から潰れた状態で出土した。壺形土器で、口頸部の破片をまったく欠く。球形の体部を有し、底部はやや突出した平底である。外面はナデ、ヘラミガキを施す。内面にはヘラナデの痕跡が顕著である。淡赤褐色を呈し、焼成は良い。復原体部最大径30.0cm、残存器高27.0cmを測る。

#### 4. まとめ

13号墳は長径約7m、短径約6m、推定の高さ0.5～1m内外の楕円形を呈する円墳である。主体部は内法の長さ約2m、幅40～50cm、残存高約50cmを測る石棺である。

石棺は地山面に掘り込まれた浅い墓壇内に設置され、平面隅丸長方形の控え積みによって補強されていた。盛土後に掘削された墓壇を持たないことは、森將軍塚古墳後円部竪穴式石室、2・9・10号墳などの竪穴系埋葬施設と共通する属性である。しかし、森將軍塚古墳後円部石室以下の諸施設は、周囲に積石もしくは盛土を行うことによって形成された「墓壇」をもつ点で共通するのに対し、13号墳にはそれに相当する構造を認めなかった。



挿図6 13号墳 出土土師器

13号墳石棺を特徴づける構造として、長側壁を角礫の小口積みによって構築するのに対し、短側壁には板石を立てていることが挙げられる。こうした壁面構成は、近辺諸古墳の竪穴式石室には認められないが、森将軍塚古墳周辺小形埋葬施設と同様の構造を見ることができる。後円部東側の28・29・38号、後円部西側の45・46号石棺は、13号墳石棺と同じ壁面構成をもつのみならず、床面に板石を敷き詰める点や、長さ1.5～2m、幅40～50cmほどの大きさをもつ点でも共通している。

以上のように、13号墳の主体部は、構造的には周辺諸古墳よりも小形埋葬施設との共通性をより強く有する。小形埋葬施設には、56号組合式箱形石棺のように明確なマウンドを持つものがあり、その点で独立古墳である13号墳と、森将軍塚古墳に寄生する従属的埋葬施設である小形埋葬施設との区別は必ずしも明確ではない。両者の差異を問題にする場合には、墳丘・埋葬施設の大きさ、副葬品の多寡、森将軍塚古墳との位置関係などの諸点が考慮されるが、いずれも隔絶的な内容の差異ではなく、呼称の問題も含めて、今後の検討を要する。

さいごに出土遺物から築造年代について考えておきたい。まず、直刀は片間で、茎はやや先細である。また、茎部の木質・繊維質の遺存状態から見て、木製の把間器具と鹿角製の把縁器具を伴うものと考えられる。鉄器は長頸蓋被片丸造柳葉式を主体とし、長頸蓋被片平刃造片刃箭式を含むセットである。いずれも直角間または台形間で、片刃箭式のもの比較の長い逆刺をもち、6世紀前半を下るものではない<sup>(註3)</sup>。土器器蓋形土器は、ほぼ完全な球形胴を有し、器蓋が薄手である点、外面調整はヘラミガキとナデによる点などの特徴をもつ。口頸部をまったく欠いており、年代的な位置付けは難しいが、和泉期に遡るものと考えてよからう。以上のことから、13号墳の築造年代は、ほぼ5世紀後半を前後する時期と考えて大過ないものと思われる。

(岡林孝作)

#### 註

- (1) この埋葬施設は、後述するように森将軍塚古墳周辺小形埋葬施設にみられる「組合式箱形石棺」の一部とまったく同じ構造をもつ。しかし、構造的にみて、この施設を「組合式」、「箱形」の語を冠して呼称することは必ずしも適切ではないと考える。今後の議論をまつこととし、ここでは単に「石棺」と呼んでおく。
- (2) 13号墳出土鉄器については、筑波大学保健管理センター・澤田作平氏、また直刀については更埴市坂口変形外科医院坂口毅氏にお願いしてX線撮影を行った。
- (3) 岡 義則 「古墳時代後期鉄器の分類と編年」『日本古代文化研究』第3号 古墳文化研究会 1986年



### (3) 14号墳

14号墳は、森將軍塚古墳後円部の東方約35m、標高476m程の尾根筋上に位置する。後円部寄りの西側には、62号組合式箱形石棺、土墳墓、15号墳が接し、東側には13号墳が接している。調査前には、10m×10mほどの平坦面上に石英斑岩の角礫が散在していたところから、第6年次調査した土墳墓と同巧のものが存在するのではないかとの子測のもとに調査を実施した。

#### 1. 墳丘 (図版6)

墳丘検出のため表土および角礫を除去したところ、東側斜面から南側石室開口部にかけて、人頭大からその3倍程の石英斑岩角礫による石積みを検出できた。そこで北側に第5トレンチを設けて追跡を試みたが石積みは確認できず、東南斜面にのみ遺存していたことが明らかになった。石積み基部の標高は、南側で475.7m、東側で474.8mを測り、東側へ傾斜している尾根の影響を看取できる。現状での高さは0.7mを測るにすぎない。石材の崩落状況を考慮してもこの石積みが墳丘全体を覆う葦石であったとは考えられず、また控え積みなどの内部構造とも認められない。尾根の傾斜を補う程度に裾を半周させた腰巻き石であった可能性が高い。この腰巻き石からすれば、墳丘の規模は東西径6m、南北径7.5mほどの、西側を15号墳墳丘に覆われる不整形の平面形だったと推測される。なお、墳丘東側には幅2mを測る堀割の存在が確認できた。

#### 2. 主体部 (図版7)

調査区を拡張し、トレンチにより検出した角礫面をさらに調査したところ、横穴式石室の側壁を検出し、14号墳は主軸をN-6°30'-Eにとり南側に開口する無袖の横穴式石室を主体部とすることが判明した。石室壁体には人頭の2倍程のやや扁平な石英斑岩礫を用いている。概ね1-2段遺存しているが、奥壁、玄室側壁、羨道部東側壁の多くはすでに失われていた。規模は、内法長5m、玄室長2.6m、幅は玄門部分で0.7m、玄室中央部で0.8~0.9m、羨道部幅は0.7~0.9m前後と推測される。またこの石室は無袖式に属するが、玄門床面に据えられた扁平な2石の間仕切り石により、玄室と羨道部に区画されている。

玄室は斜面の平坦化を意図した墓域内に設置されている。すなわち墓域は斜面上部である西側では地山に達し、下部の東側では旧表土を残している。

ところで石室の側壁は弱い膨張りを有しているが、いま規格性を見いだすことはできない。拳大の石英斑岩礫を敷いた床面は、標高475.7mを測る。

発見遺物のうち直刀(1)は、切先を奥壁側へ向け玄室南寄り、切先を開口部へ向けた(2)は間仕切り石上より出土した。(1)の周辺からは鉄銹、刀子を中心にガラス製小玉等がまとまって出土し、また玄室北寄りには、耳環や管玉、水晶製切子玉、土玉、ガラス製小玉等の玉類を中心とする副葬品が配されていた。玄室中央部は視乱が著しく、遺物はほとんど出土しなかった。

羨道部は、自然地形の整地が不十分であるため、側壁基部において比高差が生じ、開口部では西側が30cm程高くなっている。また羨道部端は、腰巻き石裾ラインより東側で約30cm突出している。床面には敷石は認められなかった。閉塞施設は、まず50×50×35cm程の大形の角礫を中央に据え、隙間を人頭大~拳大の角礫で充填している。石の積み方に規則性は認められなかった。

石室の開口部前には、幅2m程の黒褐色土を覆土にもつ落ちこみがあったので、調査区を南側に拡張して精査を行ったところ、石室側壁ラインに沿って南側へ延びる墓前城が確認された。墓前城は地山を掘り込んで整えられており、羨道部端においては床面より30cm程低くなっていた。(前島 卓)

### 3. 出土遺物

今回の調査で出土した遺物は、土器・鉄製品・耳環・玉類・石製品である。土器はすべて石室外から出土しており、墳丘上あるいは古墳の裾部に供献されたものと考えられる。その他の遺物は、一部を除いてすべて石室内から出土しており、副葬品と考えられる。

土器 (図版8) 土師器(1) 土師器は多くの破片が出土しているが、いずれも細片であり、全体の形状をうかがえるものは少ない。1はやや深い碗形をなす坏である。淡橙褐色で、内面は黒色処理を施す。推定口径12.4cm、残存器高4.6cmである。

須恵器(2~19) 蓋坏・高坏・甕・長頸壺・短頸壺・提瓶・甕がある。墳丘西側斜面、掘削内、および開口部前面などから集中的に出土している。

2・3は蓋坏の坏身である。2は復原受部径12.2cm、残存器高3.8cm、3は復原口径9.4cm、復原受部径11.1cmを測る。たちあがりは短く内傾し、端部は丸い。2は、底部へラ切り未調整で、灰白色を呈し、軟質である。3は残存する部分に回転ヘラズリを認めない。

5~9は高坏で、5~7は坏部、8・9は脚部の破片である。5は復原口径10.0cmで、やや深い碗形をなし、口縁部はほぼ垂直に立ち上がる。外面中位やや下方に2条の不明瞭な凹線を巡らす。灰褐色を呈し、内面は黒灰色の自然釉をかぶる。6は復原口径13.0cmで、外面中位及びその下方に各1条の突線を巡らす。7は復原口径11.6cmで、外面中位に幅広い凹線を巡らし、きわめて不明瞭な突線をつくり出している。8は中位に2条の凹線を巡らし、長方形の透しを2段2方に穿つ。上端は坏部との接合部で剝離している。9は復原底部径11.2cmで、細い基部から大きくラッパ状に広がり、端部付近で下方に屈折する。中位及び裾付近に、それぞれ2条の凹線を巡らす。中位の凹線をはさんで上下2段3方に長方形の透しを穿つが、上段の透しは貫通していない。

10~13は甕である。10は体部最大径8.0cm、残存器高15.1cmを測る。体部は小さく、扁球形をなす。肩部直下に径1.4cmの孔を斜上方より穿つ。肩部及び孔の下方に各1条の凹線を巡らし、その間を細かな櫛形刺突文で飾る。口頸部は細い基部から大きくラッパ状に開き、いったん内折した後端部にいたるものと思われる。屈曲部下方に断面三角形の鈍い突線、頸部中位上方には2条一対の凹線、中位下方には1条の凹線をそれぞれ巡らし、頸部外面を上下3段に区画する。上段・中段はそれぞれ細かな櫛形波状文で埋め、下段は無文である。暗灰色を呈する。

11は復原口径11.2cm、体部最大径10.0cm、器高16.5cmを測る。体部はやや肩の張った扁球形をなし、肩部やや下方に径1.1cmの孔を斜上方より穿つ。肩部および孔の下方に各1条の凹線を巡らす。口頸部は基部から斜上方に向かって外反気味にのび、いったん屈曲した後やや直立気味にのびて終わる。端部は丸くおさめる。屈曲外面に浅い凹線を巡らす。明青灰色を呈する。

12は復原口径13.3cm、体部最大径10.0cm、器高15.4cmを測る。体部は肩の張った扁球形をなし、肩部に凹線を巡らす。体部中位に径1.2cmの孔を斜上方より穿つ。孔の周囲には不完全な注口を貼付けている。底部外面は不整方向のヘラズリを施す。口頸部は細い頸部からラッパ状に大きく広がり、さらに若干内折した後わずかに外反して終わる。屈曲部外面には浅い凹線を巡らす。また、頸部中位に2条一対の凹線を巡らしている。頸部内面にはシボリ痕を残す。暗青灰色を呈する。

13は復原口径13.3cm、復原体部最大径9.0cmである。体部はやや下ぶくれの扁球形をなし、中位に径1.3cmの孔を斜上方より穿つ。孔の上下に各1条の凹線を巡らす。口頸部は頸部下半を欠くが、上方に向かってラッパ状に外反し、いったん屈曲した後直線的にひらいて終わる。端部は丸くおさめる。屈

曲部外面下方に断面三角形の鈍い突線を、頸部中位に2条一對の凹線を巡らす。黒茶色～黒灰色を呈する。

14～16は瓶類である。14は復原口径8.6cmを測る口頸部の破片である。口縁端部直下に断面三角形の鈍い突線を巡らし、中位は2条の凹線で飾る。灰褐色。15は口径7.6cmを測る口頸部の破片である。基部からやや開き気味にたちあがり、端部を丸くおさめる。淡青灰褐色を呈する。

16は提瓶で、推定口径13.6cm、推定器高27.7cm、体部最大径23.0cm、厚さ20mm前後である。体部はほぼ球形に近く、片面中央部を径8cmほどの粘土板で充填する。肩部に環状の把手一對をはりつける。口頸部は短く、口縁端部は外傾する面をなす。端部直下に断面三角形の鈍い突線を、中位に2条一對の凹線をそれぞれ巡らす。体部外面は平行タタキ目を残す。灰褐色で、全体に暗緑色の自然釉をかぶる。

17は短頸壺である。体部最大径17.1cm、残存器高11.4cmを測る。底部は大きな平底をなす。肩部外面に2条一對の凹線を巡らす。

18は台付長頸壺または直口壺の体部と考えられる。復原体部最大径21.6cm、残存器高11.5cmである。肩部は丸みをもって大きく張り、外面に1条の凹線を巡らす。体部中位以下をカキ目で飾る。灰白色を呈し、軟質である。

19は甕で、口径25.6cm、体部最大径50.4cm、器高51.2cmを測る。やや肩の張った体部から、短く外反する口頸部を有する。口縁端部は玉縁状をなす。体部外面は全面縦格子タタキ目を残し、中位以上にはその上から細かいカキ目を施す。内面には同心円文が顕著である。暗灰褐色を呈する。

鉄製品(挿図7) 直刀、刀装具、鉄鏃、刀子がある。大半は石室内からの出土であるが、5は閉塞石上部、8・9は開口部前面の黒色土中から出土した。

直刀(1・2) 1は全長84.8cm、刀身長78.7cm、茎長6.1cmを測る。3の跡を伴う。刀身の一部に木質が遺存し、黒色漆膜の付着が認められる。平造りで、間は両側から、ほぼ均等に切れ込む。長さ2.2cmの鉄製鏃を有する。茎は茎尻に向かって幅を減じ、一文字尻をなす。茎尻から約1cmの位置に目釘を認める。2は全長42.8cm、刀身長34.8cm、茎長8.0cmを測る。切先はわずかにふくらを有し、刀身は平造りである。間は両側に認められる。茎尻はきわめて薄くつくれ、一文字尻をなす。茎尻から約2.5cmの位置に目釘を認める。

刀装具(3・4) 3は、1の直刀に伴う鏃である。倒卵形を呈し、長径7.8cm、短径5.3cm、厚さ0.3cmを測る。中央に外形と相似形をなす長径2.9cm、短径1.4cmの孔を穿つ。

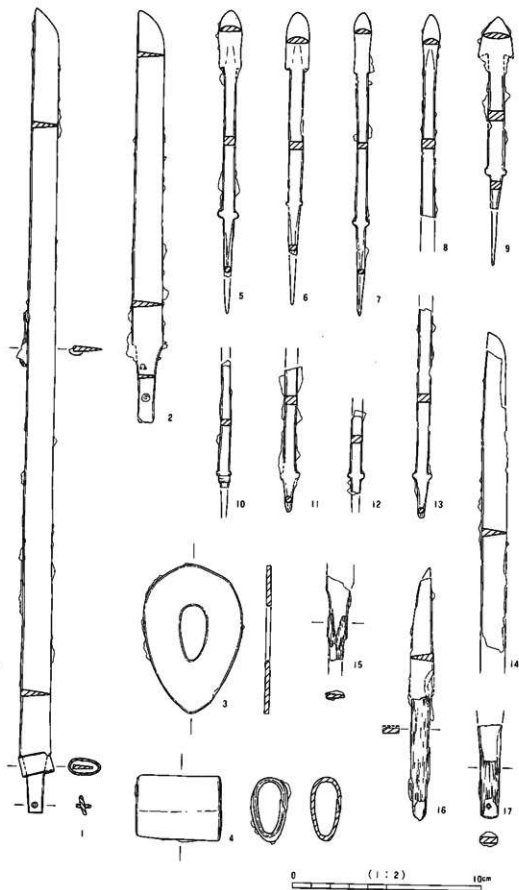
4は鞘口金具と考えられる。厚さ2mmほどの鉄板を曲げて継ぎ合わせたもので、長さ4.4cm、内径で長径2.8cm、短径1.2cmを測る。大きさから見て、1・2のいずれの刀にも伴わない。

鉄鏃(5～13) 破片を含めて16本分出土した。いずれも長頸鏃で、棘籠鍔を有する。鏃身部の形状から、4種類に分類することができる。

5・6は柳葉形の鏃身を有し、鏃身関節部は直角に切れ込む。片丸造り。5は残存長13.9cm、鏃身部長3.0cm、鏃身部幅1.3cm、6は残存長12.7cm、鏃身部長3.0cm、鏃身部幅1.2cmを測る。

7は柳葉形の鏃身を有するが、5・6に較べて細身である。鏃身関節部はほぼ直角に切れ込むが、ややナデ気味である。片丸造り。完形で、全長15.8cm、鏃身部長3.2cm、鏃身部幅0.9cmを測る。

8は柳葉形の鏃身を有するが、頸部との区別がきわめて不明瞭である。片丸造。関節部以下は欠損している。残存長10.5cm、鏃身部長2.5cm、鏃身部幅0.8cmを測る。



挿図7 14号墳 鉄製品

9は三角形の鎌身を有し、ほかのものに較べて頸部は短い。両刃造で、短い逆刺を有する。残存長9.9cm、鎌身部長2.2cm、鎌身部幅1.9cmを測る。

刀子(14~17) 刀子と考えられる破片は12点ほどある。形状の比較的明らかな4個体分について示した。

14は刀身であるが、切先、関節とも欠損している。残存長15.7cm、幅1.3cm。15は関節から茎にかけての部分で、茎尻に欠損している。両関節、茎は茎尻に向かって徐々に幅を減ずる。茎には木質が付着している。残存長4.5cm。

16は切先と関節の一部を欠損しているほかは、ほぼ全体の形状が窺えるものである。刀身は平造で、全長の約半分の長さをもつ。両関節、茎の幅はほぼ一定である。茎には木質が付着している。残存長12.2cm、茎長6.4cm。

17は茎で、関節から次第に幅を減じ、茎尻にいたる。茎尻付近に1孔の目釘孔を有する。木質が付着している。残存長4.8cm。

耳環(挿図8) 6個ある。1・2はともに銅芯銀張りで、対をなすものと考えられる。1は長径3.3cm、短径3.1cm、断面径0.8cm、2は長径3.2cm、短径2.9cm、断面径0.8cmを測る。

3・4は鉄芯金銅張りで、3は長径2.5cm、短径2.3cm、断面径0.6cm、4は長径2.6cm、短径2.4cm、断面径0.5cmを測る。5は鉄製で、長径2.2cm、短径2.1cm、断面径0.4cmを測る。6はきわめて細身の銅環で、径2.1cmのはほぼ正円形をなし、断面径は0.2cmである。

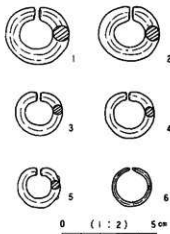
玉類(挿図9~1~36) 石製勾玉1個、土製勾玉2個、碧玉製管玉5個、水晶製丸玉・算盤玉・切子玉各1個、ガラス製小玉52個、同丸玉4個、土玉41個、滑石製白玉17個がある。

1~3は勾玉である。1は土製で、淡赤褐色を呈する。部分的に黒色半光沢の着色の痕跡を残す。長さ2.83cm、幅0.87cm、厚さ1.20cm。2は光沢を有し、明るい青灰色を呈する石製である。扁平なつくりで、頭部両面に浅い円形の袈りがある。長さ1.93cm、幅1.20cm、厚さ0.51cmである。3は土玉と同じつくりのもので、粗雑である。長さ1.30cm、幅0.76cm、厚さ0.60cm。

4~8は碧玉製管玉である。濃緑色を呈し、表面は滑らかで光沢がある。孔はすべて一方から穿たれている。大小があるが、4は長さ2.21cm、径0.90cm、7は長さ2.85cm、径1.07cmを測る。

9~11はいずれも無色透明の水晶製である。9は丸玉で、上下両端を平らにすり上げる。孔は一方より穿つ。長さ0.63cm、径0.58cmを測る。10は算盤玉で、孔は一方より穿つ。長さ0.90cm、径1.09cmを測る。11は切子玉である。平面正六角形を呈する十四面体で、孔は一方から穿つ。長さは1.78cm、径1.34cmを測る。

12~25はガラス製小玉である。色調は変化に富み、黄不透明、薄青透明・不透明、青透明・半透明・不透明、薄青緑透明・半透明・不透明、薄緑透明、緑透明、柑半透明・不透明、紫柑半透明がある。黄色は12のみで、大半は青~青緑色系の色調を呈する。大きさは多少のばらつきがあり、径2.85~4.60mm、厚さ1.80~3.15mmを測る。内部を観察しうるのはすべて孔の貫通方向に平行する気泡列を認め、いずれも管切り法によって製作されたものと考えられる。



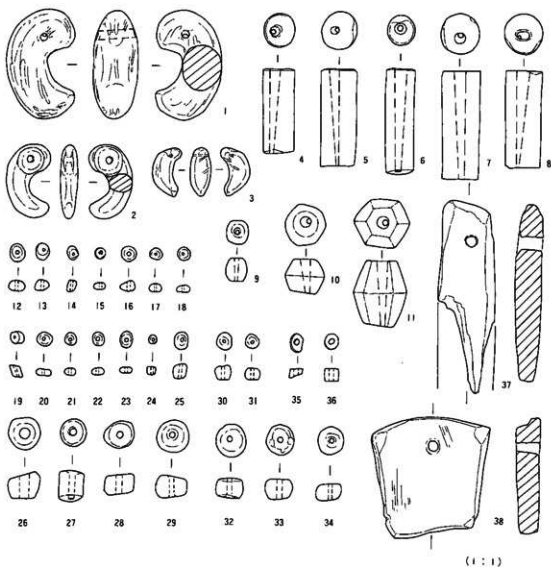
挿図8 14号墳 耳環

26~29はガラス製丸玉である。28は深青色透明、他は紫紺色半透明を呈する。径7.40~9.40mm、厚さ5.70~7.95mmを測る。いずれも孔の貫通方向に平行する気泡列を認め、管切り法による製作が考えられる。

30~34は土玉である。大・中・小があり、径8mm、厚さ5mm前後の大きなものが主体である。外面はすべて黒色を呈し、断面は灰褐色のものが見られる。

35・36は滑石製白玉である。やや緑がかった灰白色を呈し、表面は平滑である。35は径4.50mm、厚さ2.60mm、36は径3.95mm、厚さ3.40mmである。

石製品 (挿図9-37・38) 38は台形の板状品で、穿孔が認められる。37は扁平な棒状品で、先端付近に穿孔がある。一方の先端は折損している。ともに滑石製である。 (岡林孝作)



挿図9 14号墳 玉類・石製品

#### 4. まとめ

周辺古墳との関係について 14号墳周辺には東側に13号墳、西側に15号墳、土墳墓、62号石棺が相接するように築かれている。また、62号石棺南寄りの直上からは、第4年次の調査により須恵器の大甕が出土している。ここではそれらの前後関係について整理してみたい。

先に触れたように、14号墳と13号墳との関係は、堀削の土層断面の観察から、13号墳構築の時に掘り込まれた堀削が、ある程度埋没した段階で、14号墳の堀削として再び掘り込まれているとの判断により、13号墳が先行すると結論づけられた。

つぎに14号墳と15号墳および土墳墓の関係のうち、15号墳の流土を14号墳の墓墳が掘り込んでいることにより、15号墳が先行すると判定できる。また土墳墓は、14号墳墓墳上層の流土内に位置することから、14号墳が土墳墓に先行するといえる。

ところで、62号石棺の墓墳掘り方は、15号墳墳丘を掘り込んでおり、15号墳が先行することがわかる。14号墳と62号石棺の関係は、62号石棺内の埋土が14号墳墓墳埋土と共通することにより、14号墳構築の時にはすでに62号石棺が存在していたことがわかる。また須恵器大甕は破片ではあるが、14号墳出土大甕とほぼ共通する特徴を示しているから、14号墳に供献されたかまたはそれ以降あまり時間差をおかず何らかの目的で置かれたものであろう。

15号墳からは今回の調査では直接年代を示す遺物の出土はなかったが、第6年次に土墳墓下層の15号墳流土内より出土した土器を15号墳の遺物として理解すると、およそ6世紀後半に位置づけられ、5世紀後半とされる13号墳が先行することになる。

以上整理すると、13号墳・15号墳・62号石棺・14号墳・土墳墓という順序が与えられよう。

(前島 卓)

出土遺物について 14号墳からは比較的多くの遺物が出土しており、それらから大略の築造年代を推定することができる。須恵器についてみると、蓋環は口径がいちじるしく縮小し、回転ヘラケズリの省略がみられる。高環・甕は全体に装飾性が乏しく、高環の脚部は長脚2段透しを認めるものの、退化的要素が強い。これらは、陶邑編年ではTK209～TK217型式の特徴に近い<sup>(註1)</sup>。注口を有する甕や球形胴の提瓶などは陶邑にはみられない器形であるが、もとよりこれは地域性を示すものであって、14号墳出土の須恵器のセットが、単純に陶邑編年で律しえないことを示している。近年この時期の地方窯産の須恵器編年について、陶邑編年との年代的なずれを認める見解が提出されている<sup>(註2)</sup>。長野県では窯址出土資料によるこの時期の須恵器編年は進んでいないが、比較的編年作業の進んでいる愛知県、静岡県など隣県の状況を勘案すれば、やはり陶邑編年との型式変化のずれを考慮する必要がある。図版8-4の高台付環は除外するとして、より新しい要素を重視するならば、14号墳出土の須恵器はTK217型式併行をさかのぼるものではあるまい。

副葬品についてみると、直刀はともに両関で、とくに押図7-1は両側から均等に切れ込んでおり、茎もひじょうに短く、7世紀代に下がるものと考えられる<sup>(註3)</sup>。鉄鏃はいずれも鍔寛被を有する長頭鏃である。このうち長頭鍔寛被片丸造柳葉式は6世紀後半に通用のものであるが、押図7-8は鏃身関部がきわめて不明瞭で、新相を示す。また、長頭鍔寛被腸括三角形式<sup>(註4)</sup>は、TK209型式併行期に出現するとされている<sup>(註4)</sup>。

14号墳の主体部は横穴式石室であり、むろん追葬が行われた可能性がある。したがって、遺物の年代がそのまま築造年代を示すとは限らないが、7世紀前半を中心とした頃に築造されたものとして大

過なからう。また、高台付坪の存在を重視すれば、7世紀代を通じて追葬がおこなわれたものと考えられる。

(岡林孝作)

#### 註

- (1) 平安学園考古学クラブ 「陶器古墳群Ⅰ」 1966年  
田辺昭三 「須志器大成」 角川書店 1981年
- (2) 柴田 稔 「横穴式木柩粘土室の基礎的研究」『考古学雑誌』68-4 日本考古学会 1983年  
山田邦和 「飛鳥・白鳳時代須志器研究の展望」『古代文化』40-6 古代学協会 1988年
- (3) 白井 薫 「古墳時代の鉄刀について」『日本古代文化研究』1 古墳文化研究会 1984年
- (4) 関 義則 「古墳時代後期鉄鍬の分類と編年」『日本古代文化研究』3 古墳文化研究会 1986年

#### (4) 15号墳

15号墳は森將軍塚古墳後円部の東方約25m、標高476~478.5mの尾根筋上に位置する。この古墳より森將軍塚古墳後円部側には7号墳、東側には14号墳が隣接している。付近は第6年次の調査により、7号墳石室ならびに土壌墓が検出されているが、部分的に行われた調査だったため多くの課題を残していた。また土地の形状から古墳の存在も考えられていたので、その確認のため発掘を実施した。

調査は、第6年次に尾根の稜線方向に設けたトレンチを、後円部側に延長することから始めた。トレンチ東側の斜面の土層断面に盛土層が、頂部付近には墓墳状の落ち込みが検出された。盛土層は、地山の斜面とは逆方向に、泥岩細礫と黄褐色土を互層とした20~60cmの厚さの土層が6層確認された。それぞれの土層は、緻密に締め固められたものであった。これを確認するため、落ち込み部分を拡張するとともに、稜線方向トレンチに直交するトレンチを設けて調査を行った。

岩盤を掘り込んだ落ち込みは長さ2m、幅0.7m、深さ0.4m程の長方形を呈し、石英斑岩の角礫や泥岩礫により埋まっていた。遺物の出土もなかったため、これを埋葬施設とすることはためらわれた。また新たに設けた直交するトレンチの表土下は、地山ないし岩盤面となっており、盛土層や岩盤面を削平した痕跡等も確認できなかった。

調査の結果、埋葬施設ばかりか墳丘規模等をも確認することは出来なかったが、2号墳の墳丘盛土と同様の盛土層が、部分的ではあるが認められたことから、古墳であると断定した。以前この付近が桑畑として開墾された際に、墳丘のほとんどが削平されたものと考えられた。しかし、現地形から、この古墳は直径15m前後の円墳であったと推測される。さらに、頂部付近に7号墳石室が遺存すること、14号墳の墳丘に一部覆われることから、それら古墳築造以前の構築と考えられるものである。

(前島 卓)



## (5) 4号集石

4号集石は森將軍塚古墳前方部の南西側に続く尾根上の、標高約489mから490mの地点に位置している。調査前には円形のマウンド状をなしており、頂部に角礫が若干露出した陥没があったところから従来、古墳であろうとされていたものである。ところが今回の全面発掘調査により、案に相違して方形の積石塚状遺構が検出されるに至った。

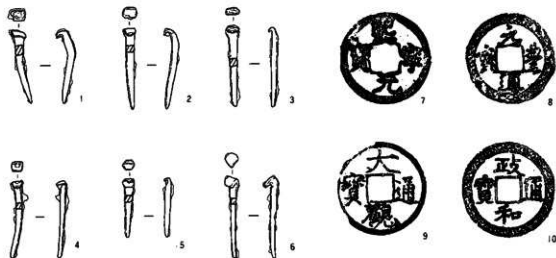
### 1. 遺構 (図版1・9)

墳丘の平面形は、一辺約5mのはほぼ正方形を呈するものと考えられる。墳丘西半の遺存状態は比較的良好であるが、東半は擾乱あるいは崩落のために、原形をとどめない。西辺の方位はN-32°-Eである。墳丘は全体的に北側へ傾斜しており、積石基底部での高低差は約90cmにも達している。墳丘の北側と東側には隣接してそれぞれ12号墳、61号組合式箱形石棺が存在する。

墳丘の築造にあたって、まず旧表土を墳丘の範囲を残して地山まで削平し、土台とする。しかし、この段階ではいぜん北側への傾斜が残るため、旧表土上に環状、あるいは弧状に石積みを行ってこれを補正している。この石積みに土を被せたのち、それを基準にして土台の範囲をこえない程度に盛土が行われる。その後、拳大から数十cm大の石英斑岩の角礫を用いて石積みを行い、墳丘を築いていく。この際、積石の裾部には大きめの礫が用いられている。なお、尾根頂部南側に2ヶ所の自然流路が確認されているが、墳丘寄りの流路は集石築造時に埋められたと思われる。主体部と思われる墳頂部の陥没部分は、盗掘によって破壊されているため、その形状・構造は不明である。盗掘坑は地山面まで掘り込まれていたため、墓壙の有無も確認できなかった。ここから鉄釘・銅銭などが出土しているが、いずれも原位置をとどめない。だが、鉄釘の存在から木棺などを使用した何らかの施設があったと考えられる。

### 2. 出土遺物

今回の調査によって出土した遺物は、鉄釘6本・銅銭4枚・須恵器片4点である。このうち鉄釘は主体部盗掘坑内から、銅銭は主体部盗掘坑内と墳丘東部表土中から出土している。須恵器片は墳丘表土、自然流路内から出土している。以下、鉄釘と銅銭について紹介する。



(1-6 1:2, 7-10 1:1)

挿図10 4号集石出土遺物

鉄釘(挿図10-1~6) 断面が方形を呈する角釘である。頭部は鍛えて延ばされた後、一方に折り曲げられて方形となっている(註<sup>1)</sup>)。また、頭部から先端にかけて次第に細くなっている。6本とも木質などの付着物は認められない。

銅銭(挿図10-7~10) 出土した銅銭は4枚あり、すべて北宋銭である。(岡須利治)

4号集石出土銅銭一覧表

(単位 cm)

番号	種類	径	方孔径	初鑄年(A・D)	備考
7	熙寧元宝	2.38	0.75	熙寧元年(1068)	真書体
8	元豐通宝	2.33	0.61	元豐元年(1078)	#
9	大觀通宝	2.38	0.67	大觀元年(1107)	#
10	政和通宝	2.40	0.60	政和元年(1117)	#

### 3. まとめ

4号集石は顕著な古墳状隆起として注意されていたが、確実に古墳時代のもと考えうる遺物がなく、明確な主体部の痕跡をまったくとどめないなど、古墳とする積極的な徴証に欠く。この種の積石遺構は、広義のいわゆる「塚」に類例を多くみることができる。岐阜県恵那市正家積石塚群は、中世の積石遺構が10数基群集しており、永楽銭などを出土している(註<sup>2)</sup>)。大半は不整円形の平面プランを有するが、方形に近いものもあり、4号集石に類似した遺構として注目する。方形という点に注目すれば、長野県下では下伊那郡阿智村坊塚遺跡(註<sup>3)</sup>)が参考になろう。坊塚遺跡例は明らかに3段に築成されており、もとより4号集石とは異なるが、この種の方形3段積み構造のものの中には、中世墳墓であることが確認された例もある(註<sup>4)</sup>)。盛土による「塚」にも、段をもたない方形の類例を指摘することができ(註<sup>5)</sup>)、墳墓と考えられるものが見られる。

4号集石の場合、鉄釘を出土していることから、木製の棺の存在を推定しうる。墳丘を有する中世墳墓では、一部の例外を除いて基底面下に土壌を掘り込むのが通例で(註<sup>6)</sup>)、今回既掘のために確認しえなかったが、旧地表下に土壌が存在した可能性は十分ある。また、銅銭が出土したことも、4号集石を中世墳墓とする理解の助けとなろう。第4年次調査の際に検出された3号集石も、同様の遺構であった可能性がある。築造年代については、出土した銅銭が北宋銭に限られ、永楽通宝・寛永通宝を含まないことから、12世紀を上限とし、15世紀を大きく下らない頃を下限とする年代幅のなかにおさまるものと考えられる。

(岡林孝作)

### 註

- 小林行雄 『続古代の技術』 城書房 1965年  
大室古墳群調査会 『大室古墳群北谷支群緊急発掘調査報告書』 1970年
- 南山大学人類学博物館 『岐阜県恵那市正家積石塚群』 人類学博物館紀要5 1983年
- 神村 通 『坊塚遺跡』 『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—阿智・飯田・富田地区—』  
長野県教育委員会 1971年
- 岸本雅敏 『福光町香城寺の中世方形三層築成石組み遺構について』 『香城寺遺跡の調査』 福光町教育委員会 1982年
- 石川長彦 『発掘された墳墓について』 『紀要』 III 岩手県立埋蔵文化財センター 1983年
- 野村幸希 『塚』 『日本歴史考古学を学ぶ(中)』 有斐閣 1986年

### 3 小形埋葬施設の調査

今年度の調査で、新たに組合式箱形石棺2基を検出した。これにより、現在までの調査で明らかになった小形埋葬施設群は、埴輪棺12基、土墳墓2基、組合式箱形石棺63基の多きに達したことになる。

#### 第61号組合式箱形石棺 (挿図11・図版1)

本石棺は、森將軍塚古墳を東方に見下ろす標高約488.3mの尾根上に位置する。4号集石の調査にもなって検出されたもので、4号集石によって埋没される位置にある。主軸方向はN-47°-Eである。岩盤を浅く掘り込んだ平面隅丸長方形の墓壇内に、石英閃緑岩の板石を箱形に組み合わせた簡単な構造である。西側石の一部と底石のみ遺存する。底石の範囲は長さ約80cm、幅40~50cmである。側石の高さから推定される石棺の深さは30cmほどである。

(岡林孝作)

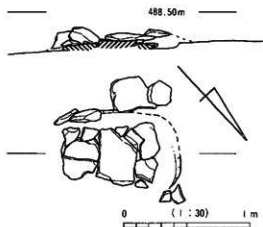
#### 第62号組合式箱形石棺 (挿図12・図版6)

本石棺は、今回調査を行った14号墳と15号墳の墳丘の間に、その主軸を尾根筋と直交する方向に向けて検出された。斜面に立地していることから、土の流失により原状はかなり損われている。特に、斜面下側に当たる東側壁は、3石がかりうじて残っているほかはほとんど失われ、掘り方も残っていない。石棺の南側小口も残っておらず、これが再び流入した土砂によって埋まっていた。

構築には、まず石棺よりもひとまわり大きい墓壇を掘り込んでいる。深さは現況で約45cmを測り、東側壁付近を除いては岩盤にまで達している。その際に20~40cm大の礫を並べ、積み上げることによって、壁を築いている。小口部は北側に2石が残るだけであるが、薄い方形の立石によっている。床面には岩盤が露出しており、床石は現状では見られない。石棺の規模は、長さが内法で約180cm、幅は約45cmが推定される。高さは明らかでないが側壁の高い部分が36~38cmを計っている。

遺物は土器片が少量石棺内から出土しているにすぎないが、それらも流入土に含まれているもので、本石棺に伴うものとは考え難く、築造年代を決める資料となり得ない。相対的には、隣接する2古墳との先後関係からある程度の手がかりが得られる。墓壇を掘り込むのに15号墳の墳丘盛土を切っていること、また14号墳の墓壇埋土は、本石棺内の埋土と共通していることから、本石棺は15号墳構築後に造られ、14号墳構築時、すでに構築後ある程度の時間を経て、一部は崩壊していたことが窺われる。

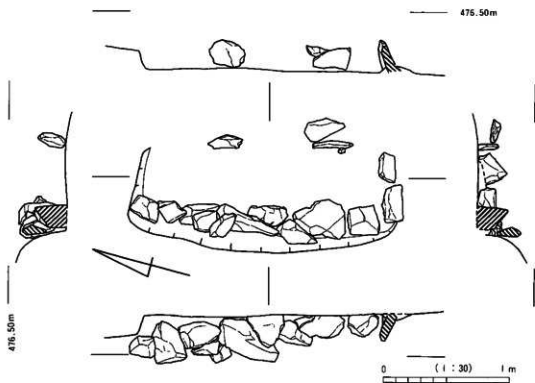
(三木ますみ)



挿図11 第61号組合式箱形石棺

**小形埋葬施設の在り方** 今回得られた成果として、森將軍塚古墳に寄生する多数の石棺と同様の埋葬施設が、従来知られていたよりも広範囲に分布していることを明らかにした点がある。前方部前面の丘尾切断部以西には、すでに53号以下の3基の石棺の存在が知られていたが、今回検出された61号組合式箱形石棺は、それらよりもさらに西側に約10m離れた位置に構築されていた。後円部東側で検出された62号組合式箱形石棺も、以前の調査でもっとも東側に存在が確認されていた51号・59号石棺よりもさらに約28m東に離れて構築されている。

周辺小形埋葬施設の主軸方向が、おおむね森將軍塚古墳の外形に規制されているらしいことは、すでに第3年次概報などで指摘されている。今回森將軍塚古墳から比較的離れた位置で検出された2基の石棺も、ほぼこの原則に沿うものである。すなわち、61号石棺は2号・9号石棺などの前方部前面の一群と同じく、ほぼその主軸方向を前方部前面の外形線の方に一致させている。62号石棺も、後円部背面の50号・51号石棺などと同様に、ほぼ後円部背面の外形線の方に合わせていることが注意されるのである。このことは、61号・62号石棺が他の小形埋葬施設と共通の意識下に設けられたことを意味しており、今回両者がいわば偶然に検出されたことを考えると、周辺小古墳の墳丘下を含めた未調査区域に、小形埋葬施設がさらに存在している可能性はきわめて高い。 (岡林孝作)



挿図12 第62号組合式箱形石棺

#### 4 埴輪の整理調査

調査8年目を迎えた本年は、森將軍塚古墳の前部から数個体出土している形象埴輪を中心に整理調査を行ってきた。異形埴輪、あるいは家形埴輪などの名で呼ばれてきたこの埴輪は、後円部墳頂にも樹立されたらしいが、むしろ前部頂部に集中的に樹立されたという方が正しいようである。今回主に復原作業を進めた2個体の前部頂部出土埴輪を中心に、この、断面が長方形を呈する形象埴輪の形態、そしてそれらの墳丘上における分布について述べていきたい。なお、適切な名称が見いだせない現在、むしろその形態上の特色をそのまま生かして、断面長方形の形象埴輪、これを簡略化して「長方形の形象埴輪」と表現しておきたい。

長方形の形象埴輪の形態(挿図13-1・2) 1・2は前部前部から混在して出土しており、当初は同一個体と思われたが別個体であることが判明している。出土状況から、前部前部近くの頂部に立てられていたと考えられる。

1は基部から2段目までの破片で、その大きさは短辺35~40cm、長辺(推定)60cm、第1段の幅(凸帯間)13cm、第2段19cm、2段目までの高さ40cmである。第1段には透孔がなく、基部端に粘土紐を貼りつけ巡らせた横位の凸帯と、四隅および各辺の中央部に、縦位の凸帯が認められる。第2段にも四隅と長辺の中央に縦位の凸帯が認められるが、短辺は欠損していたため、貼付されていたか否か不明である。1段目の縦位凸帯の断面が長方形であるのに対し、2段目のそれは中央が凹むタイプである。透孔は長辺の半分、縦位凸帯で区切られた片側の面に、この古墳の円筒埴輪に普遍的な二辺が内弯する三角形の透孔が上段に2個、下段に3個千鳥状に向きあって穿たれている。横向きの三角形透孔の破片も発見されているから、短辺にも透孔があったと考えられるが、その配置は不明である。色調は橙褐色~茶褐色を呈し、胎土は他の器種の埴輪のものと同じでない。焼成にはむらがあり、長辺の一面は反対側の面に比べて焼きが悪く橙褐色で、黒斑が大きく認められる。黒斑は主に基部端から外面にかけて認められる。外面調整は、第1段ではやや粗いヨコハケの後、細かいタテハケが施されているが、短辺では1次調整のヨコハケを消しきらず、そのまま残されている。第2段には細かいタテハケが施されているが、凸帯付近のタテハケはやや粗い。透孔の割付線は、ハケメ調整後に施されている。内面は、第1段ではやや粗いナナメハケ、第2段はやや粗いナナメハケの後、一部指によるナデ調整が行われている。第1段の凸帯は器壁を外方に折りまげる、いわゆる樋口縁状であるのに、第2段の凸帯は組合式である点も、円筒埴輪の技法に通じるものがある。第2段とその上段との接合面にはハケメの痕が残っており、凸帯接合付近の内面調整は細かいヨコハケである。なお、第2段の凸帯上部には剝離痕があるからまだ上の段へ続くと考えられるが、それをうかがうに足る資料は未だ発見できない。

2は、基部付近を欠き、いわゆる「屋根」の部分から下へ2段以上続く資料である。胎土・調整などの点から同一個体と考えられる破片があつた2段分があるが、直接接合できない。最大長は60cm、最大幅40cm、高さは現在復原した段階のものに2段分の破片を加えると、75cmになる。しかしその現存する最下段の破片に透孔がみられることから、まだ下の段へ続くと考えられるので、復原高75cm以上と想定しておきたい。平面形は楕円形に近い形を呈しており、「屋根」の次の段の幅は17cm、2段目の幅は16cmである。

「屋根」の部分には透孔がなく、頂部には棟を思わせる凸帯が縦走している。これは次の段に貼りつけられた縦位の凸帯と接続し、横位凸帯に接したところで終わっている。「屋根」の下部凸帯部分

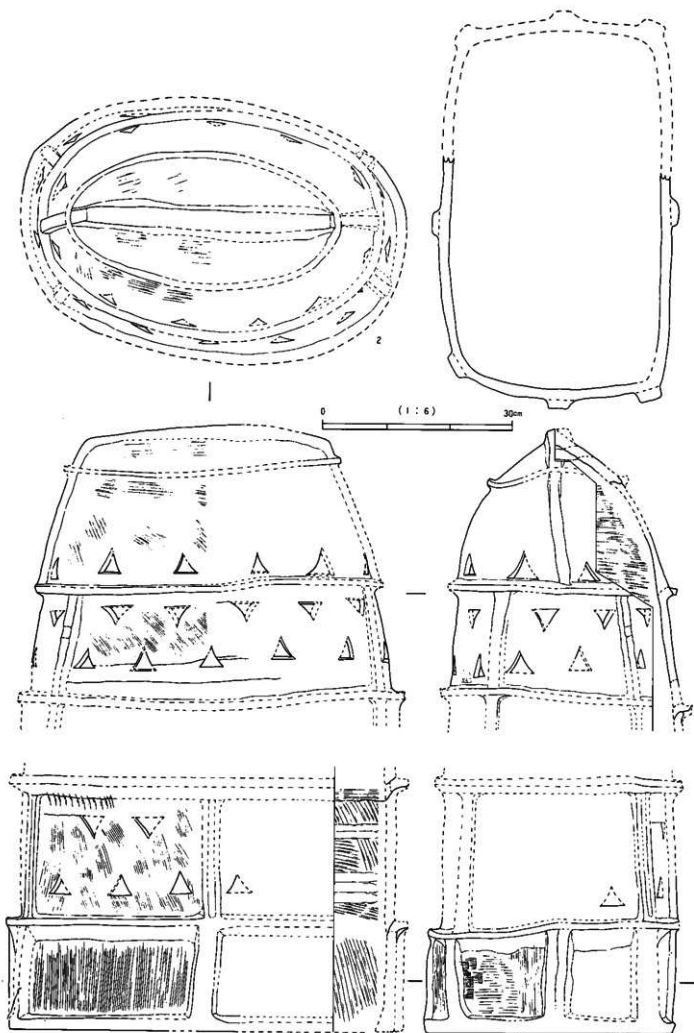


插图13 埴輪実測図

は、『屋根』側につくった凹部に下の段を接合させ、その後凸帯を貼りつけている。『屋根』の下の段には二辺が内湾した三角形の透孔が、正位で1段だけ穿たれている。歪みが著しいためか、凸帯に区切られた二つの面の透孔数はそれぞれ異なり、片面は6個、もう一つの面には5個の透孔が穿たれており、非対称である。透孔の数は2段目でも同様に、4本貼りつけられた縦位凸帯に区切られた四面のうち、幅が長い方の二面では、二辺内湾の三角形透孔が上段5個、下段に5個、千鳥状に向かいあって穿たれる面と、上段4個、下段4個である場合とがある。同様に幅が短い方の二面でも上段2個、下段に2個穿たれる面と、上段1個、下段に2個穿たれる面がある。この段には透孔のための割付線が施されているが、数本ある割付線の中には、穿たれた透孔と大きくずれている線も残っている。

【屋根】の下の段の凸帯は、断面三角形に低くつくり出した凸帯の上に粘土紐を貼付して突出度を増している。『屋根』の2段下の段はあまり内湾せず、平面的である。胎土・色調は1と同様で、焼成にはむらがあり、焼きのよい茶褐色を呈する側の外面に、黒斑が広く認められる。外面調整はヨコ・ナメハケの後、ハケをほとんどナデ消している。各段によって内面調整が異なり、『屋根』部分はナデ、その下の段は細かいヨコハケ、2段下は粗いヨコ・ナメハケ、及びユヒナデである。

長方形の形象埴輪の出土位置 森將軍塚古墳の前方部前面からは、前述した2個体のほかに3個体の長方形の形象埴輪が出土している。また、後円部墳頂においても類似したものを2個体分確認している。両者を比較すると、胎土・凸帯・透孔などに相違がみられる。

後円部墳頂から出土した長方形の形象埴輪の胎土は粗さが目立ち、大粒の砂粒を多く含んでいる。しかし凸帯は擬口縁状凸帯のほかに、低くつまみ出したうえに平行線の刻みを入れたものがあり、縦あるいは斜め方向に走っている<sup>(註1)</sup>。透孔は二辺が内湾した小形の三角形が基本的に千鳥状に穿たれ、また透孔の周囲三辺全てに割付線を残している。他に巴形透孔も認められる。残念なことに後円部墳頂は捜査がひどく、出土した資料が少ないため、大きさや全体の形態を伺い知ることができない。

まとめ 森將軍塚古墳の長方形の形象埴輪に類似する器種として、これまで家形埴輪・圓形埴輪・合子形埴輪などがあげられてきた。また大阪府弁天山C1号墳<sup>(註2)</sup>、群馬県下郷天神塚古墳<sup>(註3)</sup>出土の埴輪を、やや類似する例としてあげることができるだろう。それらと異なり、森將軍塚古墳の例は、形態的には『屋根』状の構造物をもち、上部が塞がれること、建物の柱を示すような縦位凸帯があることから、家形埴輪に近いと考えられるが、透孔などに問題が残る。通例の家形埴輪と異なり、後円部墳頂以外、とりわけ前方部前縁の中軸線近くからまよって出土している点にも配慮しなければならない。出土部位からみて、墳丘を圍繞する円筒埴輪や朝顔形埴輪列の一部を構成していたとも考えられる。

長方形の形象埴輪の大きさは短辺35～40cm、長辺60cm前後で、高さについては円筒埴輪・朝顔形埴輪の80～85cmを上回る可能性がある。また、他の器種にみられるように、大きさの点では個体ごとの差がないものの、形態的には外面調整・透孔の形態などを中心に、各個体がそれぞれ特徴をもつという多様さに注目しておきたい。

(山根洋子)

註

- (1) 更埴市教育委員会 『長野県森將軍塚古墳』 1973年、P.71 27図-6～11
- (2) 大阪府教育委員会 『弁天山C1号墳』『弁天山古墳群の調査 大阪府文化財調査報告17』 1967年
- (3) 群馬県教育委員会 『下郷』『関越自動車道(新四線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第1集』 1980年

## 5 まとめ

**本年度事業の成果** 1988年度の調査・資料整理ならびに整備事業については、すでに各担当者によって詳細に述べられている。それらは、以下のように要約してよいだろう。

発掘調査は、周辺古墳に限って行われ、前方部前面の堀割外方と後円部背面の森2号墳に至る尾根筋上という、ともに森將軍塚古墳の兆域外と思われる地点が対象となった。そのうち、12号墳は墳形を把握するに至らなかったが、西に開口する無袖式横穴式石室は、現長とはいえ2.3m程の小規模なものであった。7世紀前半の所産と想定している。

13号墳は、7×6mという楕円形に近いプランをもつ小規模な円墳で、墳丘高も1mに満たない。埋葬施設は、長側壁を板石小口積みによって築くなど、竪穴式石室を思わせる手法をみせているが、1.92×0.49mという平面形は、石棺のそれと判断された。副葬された鹿角装大刀や鉄鏃などは、比較的古式をとどめ、墳丘裾から出土した壺形土師器もまた、南関東地方の和泉式土器に併行するものとみてよいので、5世紀代の古墳と判定された。

14号墳も6×7.5mのややいびつな円墳で、これまた現高0.7mを計測するにすぎなかった。南に開口する無袖式横穴式石室は、全長5m、室幅0.7～0.9mであった。石室内から出土した副葬品のうち、玉類の多様さが特記される。直刀・鉄鏃または墳丘や裾部から多量に出土した須恵器から、この古墳も7世紀前半の築造と結論づけられた。

15号墳は、墳丘の原形を知る術がなかっただけでなく、すでに埋葬施設まで失われていた。だが層位関係から、14号墳に先行することは明らかで、先年同地点から出土した須恵器を関連づけるなら、6世紀後半ごろの古墳ということになるという。いまはその説に耳を傾けておきたい。

今次調査でも、いわゆる小形埋葬施設が2基発見された。特記すべきは、その位置であろう。すなわち、61号石棺は、森將軍塚古墳の墳域を囲する前方部前縁の、丘尾切断のために設けた堀割の外方にあり、わずかに残る底石から長さ0.8m前後の石棺だったと判定された。一方の62号石棺は、長さ1.8mと通常の箱式石棺だったが、これまた森將軍塚古墳から離れた、14号墳と15号墳の間に介在していた。

古墳時代の遺構のほかに、今回は4号集石と名づけた中世墓も調査された。これなどは、その外観から長い間小円墳だと想定されてきたもので、いまさらながら先入観を排した調査の必要性を痛感させられた。

既往の出土遺物の整理の中で注目されたのは、特殊な形象埴輪群であった。これが何を形象化したものかも、実はさだかでないのだが、前方部前端近い墳丘中軸線付近と後円部頂に、複数樹立されたらしいこと、また各個体ともそれぞれ形態差を有していたこと、後円部頂の同種の埴輪とは作りが異なるらしいことなどが指摘されている。

最後になったが、整備工事も順調に進み、後円部脚下の崖も崩壊の恐れが遠のくとともに、今年はそこが緑に覆われることも約束されるにいった。森將軍塚古墳東側の見学路・復原された貼石帯など、工事の完成に向けて大きく動きだしたことを喜びたい。

**埋葬施設群の構成** 小形埋葬施設と総称された、石棺をわずかに覆い隠す程度の積石もしくは封土をもつ施設群は、森將軍塚古墳の兆域と推定されていた範囲内にとどまることなく、かなりの広域に分布していたらしいことが明らかになった。そればかりか、これらにも森將軍塚古墳兆域内に群を



た石棺群にみられた通則、すなわちその主軸を墳麓線に平行させるという意識が、これまた作用していた公算が強いという。この軸線のとり方を、森將軍塚古墳とのかかわりにおいて埋葬施設群が設けられたことの反映と理解してよいなら、関係施設数は未調査区の広さからみて相当数に達したと考えておかねばならなくなった。

すでに知られているように、これらの埋葬施設群は、森將軍塚古墳の築造に端を発し、相当な期間にわたって設けられたと推測されている。18号石棺の曲刀鏃、29号石棺の鍔笠被をもつ長頸鏃などは、その一端を示すものである。そうであれば、7号墳裾から発見された土墳墓もまた、それらの一環として設けられた疑いが生じよう。これまた軸線方位は、森將軍塚古墳麓に平行している。また、小形埋葬施設群の造墓期間の長さを認めるなら、これと併行して小円墳群の築造も始まっていたことになる。5世紀中葉までに築かれた2号墳は、おそらく他と区別して考えるべきだろうが、これを除いても、13号墳が確かに5世紀の築造であるし、9・10号墳もまた下っても6世紀初めの所産だったから、12号墳のころまで円墳群もまた長期にわたって築かれたと断じてよい。つまりここでは、森將軍塚古墳という、地域きっての首長墓の築造に始まる造墓活動が、7世紀に入るまで続けられ、重層的な一大墳墓群を構成するに至ったのである。群集墳構成のタイプとして注目せねばなるまい。このようにみえると、12号墳の石室の開口方位が、3・4号墳などのそれとともに、森將軍塚古墳後部部の位置に規定されているようにみえる点も気になる。軸線を墳麓線に平行させようと思図したかにみえる他の横穴式石室を含めて、すべてに森將軍塚古墳とのかかわりを推測してみるの、穿ち過ぎであろうか。

61号石棺の位置で想起されるのは、長野市川柳將軍塚古墳の前方部兆域外から出土した埴輪円筒棺の存在である。両者の位置関係には通じあうものがあるから、川柳將軍塚古墳の近傍にある数基の小円墳を合せ、ここでもまた多少の差はあれ、森將軍塚古墳を中核として発達したものと相似た墳墓群が形成されていったと想定して大過なからう。群集墳の一類型と指摘したゆえんである。同じ更地市内でも倉科地区の杉山古墳群などは、6世紀に始まり7世紀に終わる小円墳ばかりの群集墳である。これらとは、区別して考える必要があるだろう。

遺構・遺物の二・三 7世紀に入ると推測された14号墳の横穴式石室は、全長5mを計測する無袖式であった。同じ7世紀の所産とされた12号墳の石室もまた無袖式だったが、この方の規模は石棺のそれに近い小型のものであった。横穴式石室の最終的な姿が無袖式となる例は、決してこの地だけのことではない。長野県内でも、松本市安塚古墳群などはその好例といえるだろう。それに加えて12号墳のような小規模石室の出現を、終末段階の姿相と結びつけてよいなら、横穴式石室における多葬から単葬への変化にかかわる西方の横穴式石室の変化のある側面を反映する、といえるかもしれない。これらの点は、すでに前節で岡林孝作氏が述べているところであるが、長野県下における横穴式石室導入期のあり方とは、大きく異なることに再度注目しておきたいのである。

今次調査でも、土玉の名で一括した玉類が相当数出土した。この種の玉は、細密な土を練り固めた上で、外表を深黒色に仕上げるものである。かつて私は、その黒色仕上げが黒漆ではないか、との疑念を抱いたことがある。だが栃木県下の同巧品を調査された東京国立文化財研究所の見城敏子氏によれば、それは台湾産漆の性状に類似してはいるが、ケヤキの水抽出物にも近似するという。いずれにせよ漆状塗膜であることは認めてよく、栃木県宮内10号墳出土例などは、見城氏により刷毛を用いて

の3度の塗布が想定されている。この種の塗膜が何であるのかは、今後引き続いて明らかにすべく手を打たねばならない課題と考えている。

**用語をめぐる問題** 未解明の問題に関連して、今回の調査概報を作成するにあたり、考古学上の名辞にかかわる混乱が生じたことも記憶しておきたい。すでに数年前から、とかく論議の種になっていたのが、石棺と石室の区別に関する問題であった。整備事業に着手したころ、森将軍塚古墳の裾部に目立った小型の石棺に対し、私どもは組合式箱形石棺の名を付した。多様な構造をもつ施設ではあったが、その規模からして室とは考えられないという、機能面が考慮されてのことであった。

しかるに、森2号墳の埋葬施設に関しては、全長4mに余るという規模からして、機能上は明らかに室であったと思えるのに、これを石棺と表現した。板石の面を横に揃えるという、四壁の築き方が、箱式石棺のそれであるというのが根拠であった。構造面の重視といえるだろう。こうした一貫性を欠く分類がもたらした矛盾が前面に立ちはだかったのが、今回の調査だった。

日本考古学の世界では、棺を取納あるいは被覆する施設を室と呼んでいる。したがって小規模な石室の場合は、そこに棺をおさめたか否かによって室なのか棺なのかを決めることになる。しかし、現実には木棺などは腐朽して残らないのが常態である。したがって紛らわしい構造物を前にしたとき、調査者たちは、上記した二つの視点のいずれかによって、あるいは棺としまああるいは室と呼んできたのが実情である。この場合、底石の有無が必ずしも決め手になりえないことも、説かれるところである。確かに小規模な埋葬施設の場合、決め手を見いだすのは困難と思うが、多数の石棺・石室が発見された森将軍塚古墳において、この問題を避けて通るわけにいかないだろう。類別の再検討を肝に銘じておきたい。組合式という語に、全く別の概念を与える例があることにも留意したい。

用語の困難さという点では、今回とりあげた形象埴輪の名称も同様である。この埴輪は、初め原型不明であるというところから、異形埴輪と呼んだ。ところが、これには屋根形構造物が載ることが確実となった時点で、若干の冒険を承知しつつ、家形埴輪に名称を変更した。だが復原作業の進展とともに、縦横に凸帯を配し、また透孔を穿つこの埴輪には、いまのところ家の形象化と主張する根拠が見いだせなくなってきた。そこで今回はまたも表現を変えて、(断面)長方形の形象埴輪とした。もともとこの名称が当を得たものとは考えていない。

この埴輪に類似するものとして、大阪府弁天山C1号墳や群馬県下郷天神塚古墳出土品が注意にのぼることは、山根洋子氏の記すとおりである。しかし、これらは千鳥に配する三角形透孔こそ類似するが、森将軍塚古墳例にみる屋根形もなければ、縦位の凸帯もない。加えて断面形が長方形である点を森将軍塚古墳例の特色とするのなら、弁天山C1号墳のそれは長楕円形、天神塚古墳のものは円形である点を強調しなければなるまい。しかしながら、弁天山C1号墳の長楕円形形象埴輪は、前方部前面と後円部前面に集中する傾向があったというから、森将軍塚古墳でのあり方に近似する。これがもし、両者に共通の意図の存在を意味するとすれば、この埴輪の原型を求めるのは森将軍塚古墳だけの問題ではなくなるだろう。十分慎重に検討をすすめたい。

森将軍塚古墳の調査概報も、本冊をもって終刊となる。第1冊刊行のころと、執筆陣もすっかり変わってしまった。これからの本報告づくりには、これまでにかかわったすべてのメンバーが力を結集してとり組めるよう、期待してやまない。

(岩崎卓也)

昭和63年度史跡森將軍塚古墳保存整備事業関係者（五十音順）

■整備委員会

指 導 安原 啓示 文化庁記念物課文化財主任調査官  
 加藤 允彦 文化庁記念物課文化財調査官  
 小林 秀夫 長野県教育委員会文化課主任指導主事  
 委 員 岩崎 卓也 筑波大学教授  
 木下 正史 奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部第二研究室長  
 斎藤 豊 信州大学助教授  
 田中 哲雄 奈良国立文化財研究所保存工学研究室長  
 森嶋 稔 上山田小学校教諭

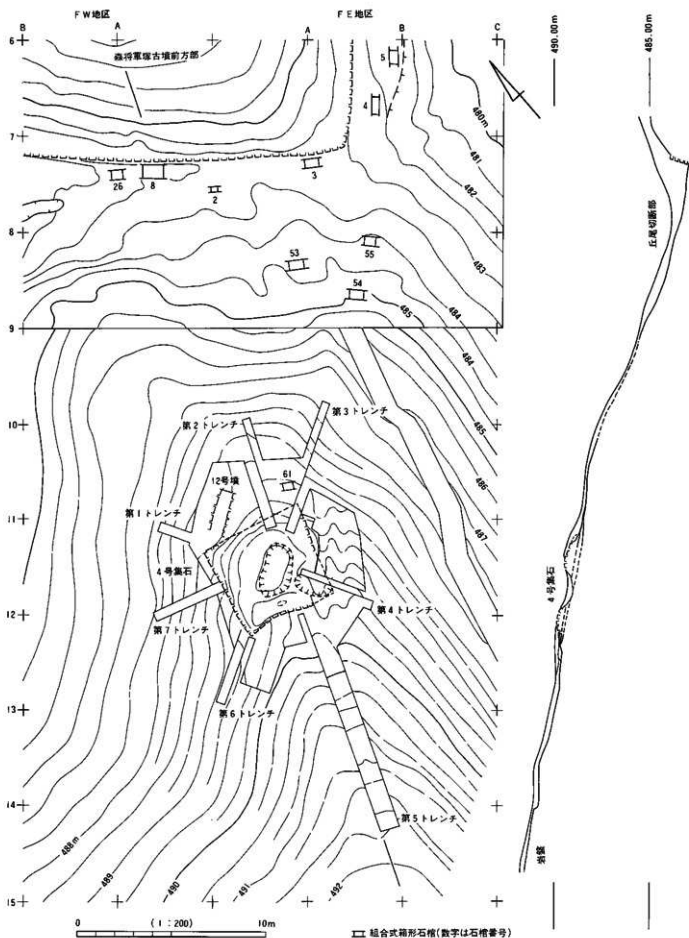
■発掘調査団

顧 問 米山 一政 更埴市文化財保護審議会委員  
 調 査 指 導 木下 正史  
 小林 秀夫  
 近藤 英夫 東海大学助教授  
 関根 孝夫 東海大学教授  
 立木 修 奈良国立文化財研究所技官  
 田中 哲雄  
 松浦有一郎 東京国立博物館考古課先史室長  
 団 長 岩崎 卓也  
 副 団 長 森嶋 稔  
 調 査 主 任 矢島 宏雄 市教育委員会社会教育課  
 調 査 員 及 び 青木 一男 長野県埋文センター 稲村 繁 横須賀市教育委員会  
 岩崎 充宏 熊本大学大学院生 岡林 孝作 筑波大学大学院生  
 協 力 者 木下 亘 榎原考古学研究所 笹沢 浩 長野県埋文センター  
 佐藤 信之 市教育委員会社会教育課 三木ますみ 筑波大学大学院生  
 塩谷 修 土浦市教育委員会 滝沢 誠 筑波大学大学院生  
 土屋 積 歴代高校教諭 那須 利治 筑波大学学生  
 福沢 幸一 長野県埋文センター 北條 芳隆 大阪大学大学院生  
 前島 卓 立正大学学生 松尾 昌彦 松戸市教育委員会  
 三木 弘 神奈川歯科大学講師 武蔵 美和 徳島県立城の内高校講師  
 森田 久男 宇都宮女子商業高校講師 山根 洋子 市教育委員会社会教育課  
 調 査 参 加 者 金井 透 神野 武男 坂口 昌幸 高橋八重子 高沢 豊延  
 柳沢 幸好 横山 明 若林きくい  
 事 務 局 安藤 敏 武井 豊茂 西沢 秀文 矢島 宏雄 佐藤 信之 青木 猛治  
 田中 啓子 山根 洋子—市教育委員会社会教育課文化財係

■整備工事

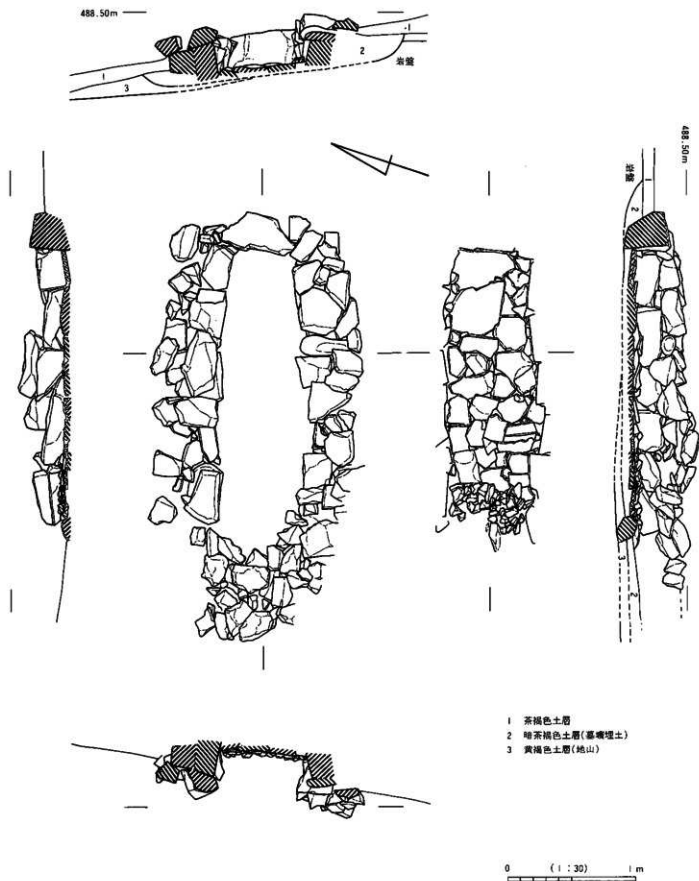
設計・監理 勤長野県建設技術センター（宮田浩邇）主任技術者 保科 正美  
 副主任技術者 横谷 陽  
 株式会社文化財保存計画協会（矢野浩之）主任技術者 荒井 仁  
 施 工 株式会社 北 澤 組（北澤志郎）現場代理人 松本 和夫  
 主任技術者 大倉 康次

図版1 12号墳・4号集石発掘調査全体図

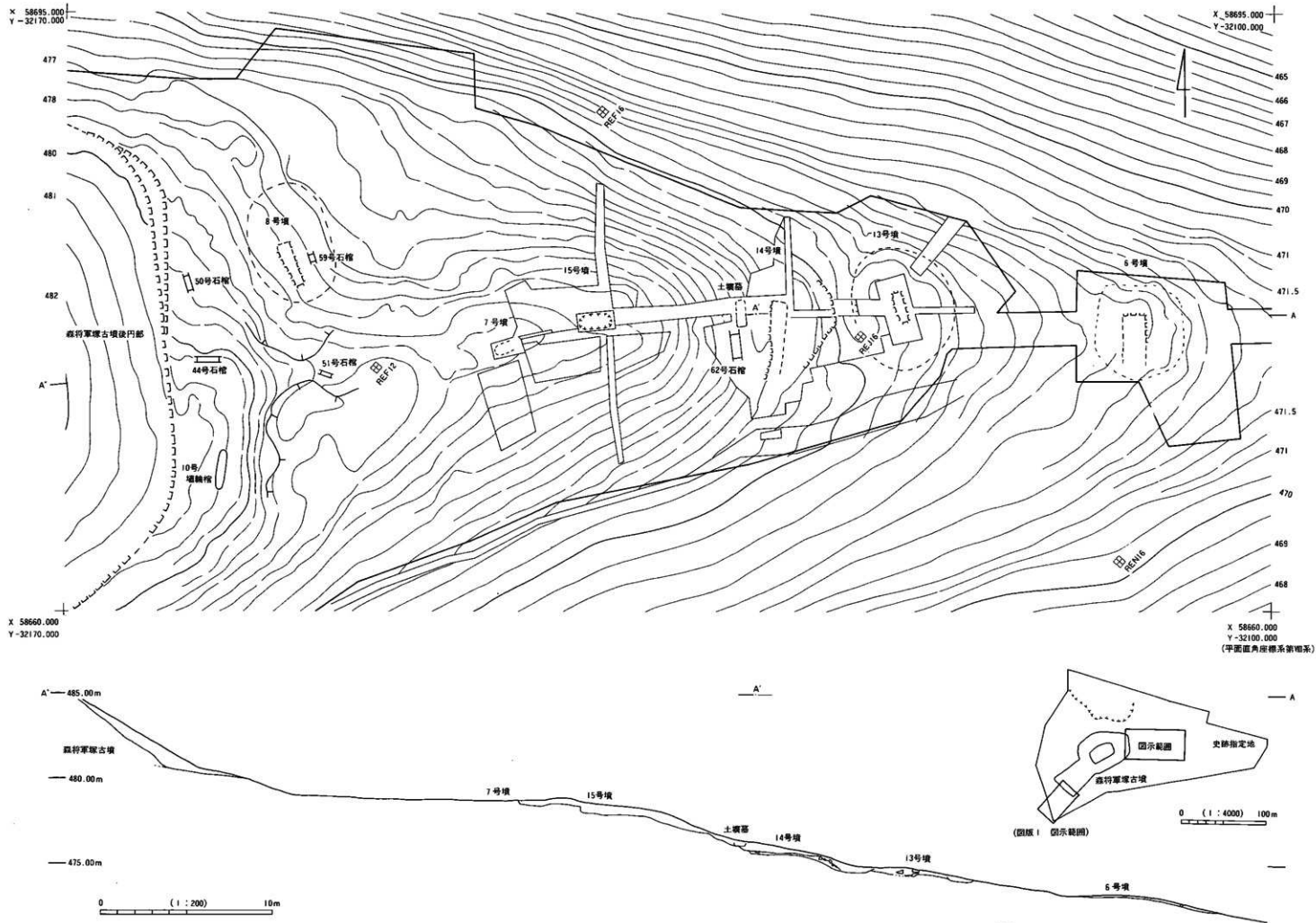


□ 組合式箱形石椁(数字は石椁番号)

图版 2 12号填石室



图版3 13~15号填发掘调查全体图



X 58685.000  
Y -32170.000

X 58660.000  
Y -32170.000

X 58695.000  
Y -32100.000

X 58660.000  
Y -32100.000

A' — 485.00m

蘇特軍塚古墳

— 480.00m

— 475.00m

7号墳

15号墳

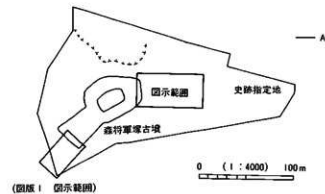
土壇基

14号墳

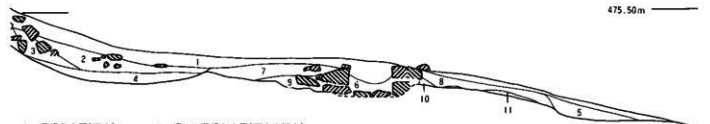
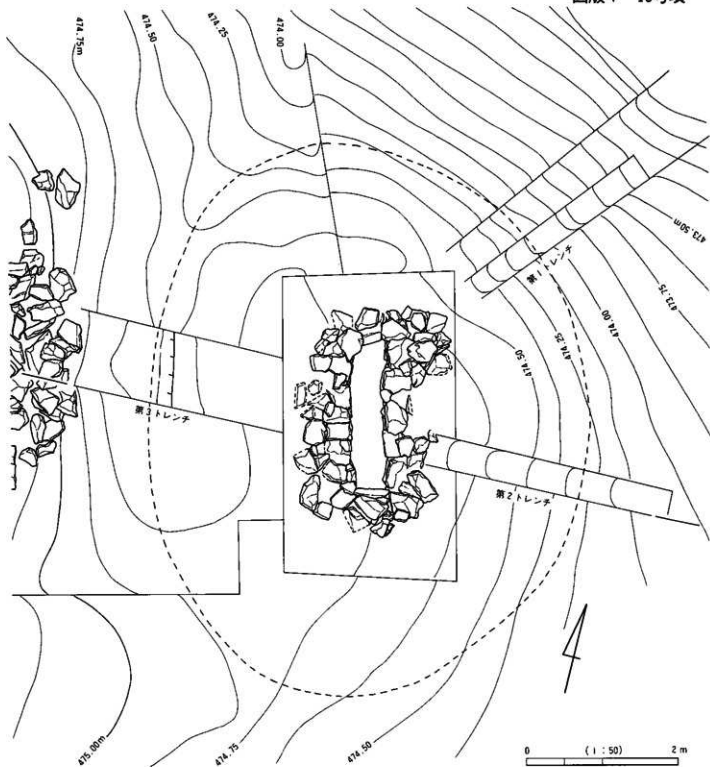
13号墳

6号墳

6号墳

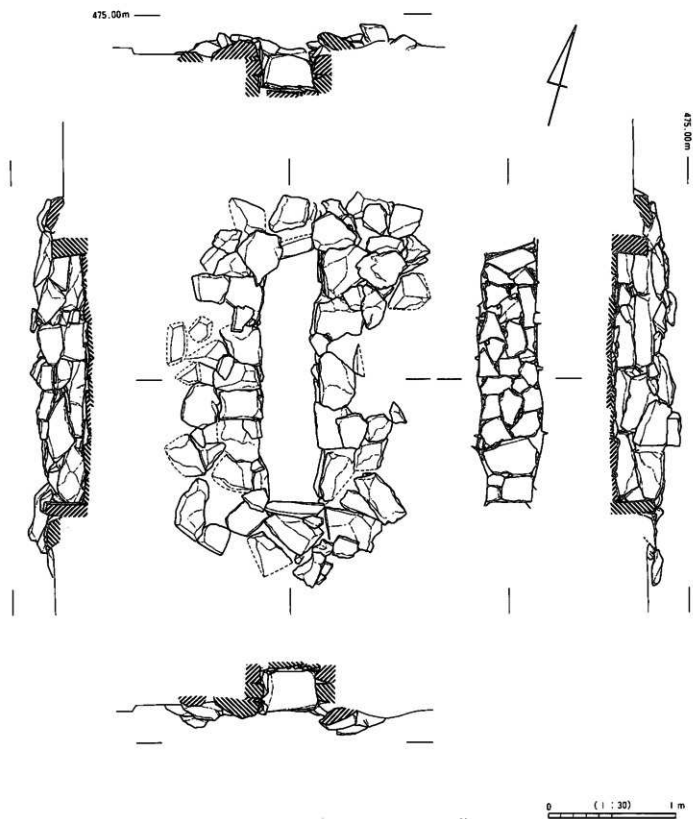


0 (1 : 200) 10m



- |               |                   |
|---------------|-------------------|
| 1 黄褐色土層(表土)   | 6 混レキ茶褐色土層(石室内埋土) |
| 2 黒褐色土層(流土)   | 7 混レキ茶褐色土層(盛土)    |
| 3 茶褐色土層       | 8 暗黄褐色土層          |
| 4 暗茶褐色土層(埋埋土) | 9 暗灰褐色土層          |
| 5 暗茶褐色土層      | 10 混レキ茶褐色土層(控え積み) |
|               | 11 黒褐色土層(旧表土)     |

图版 5 13号墳石室

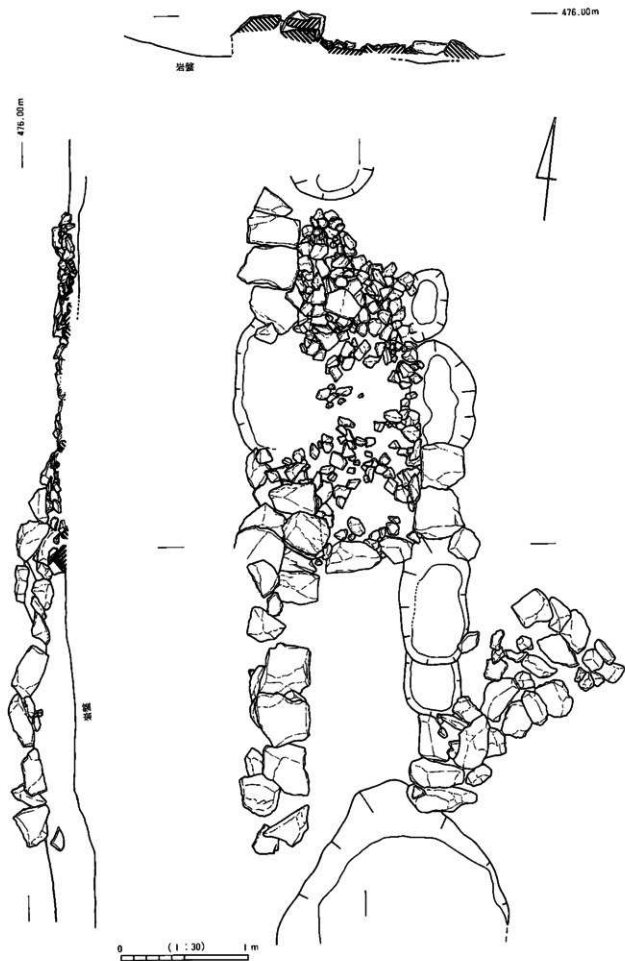


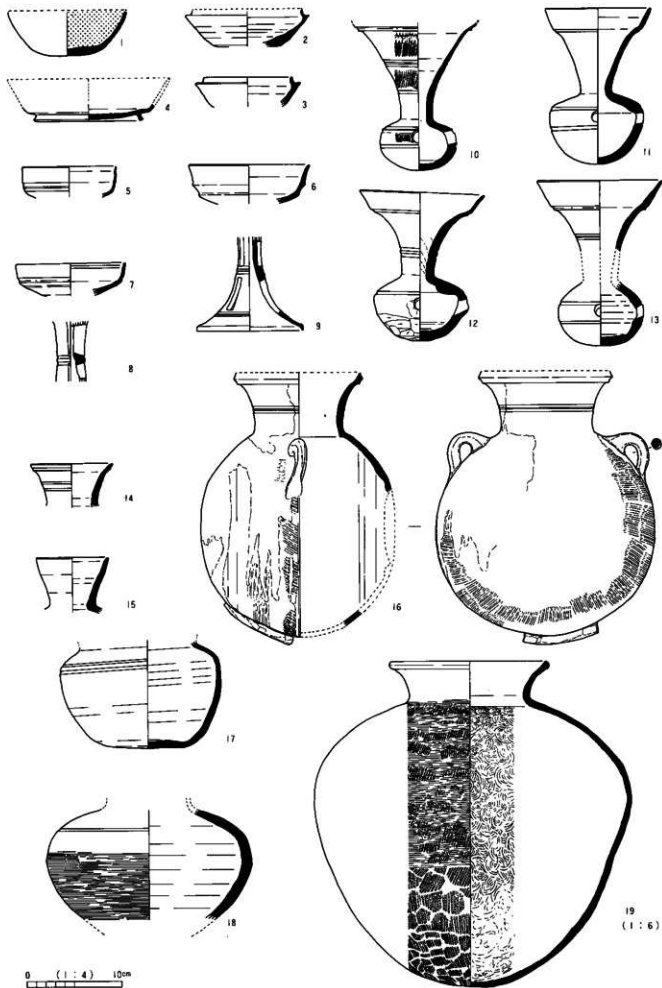


図版6 14号墳



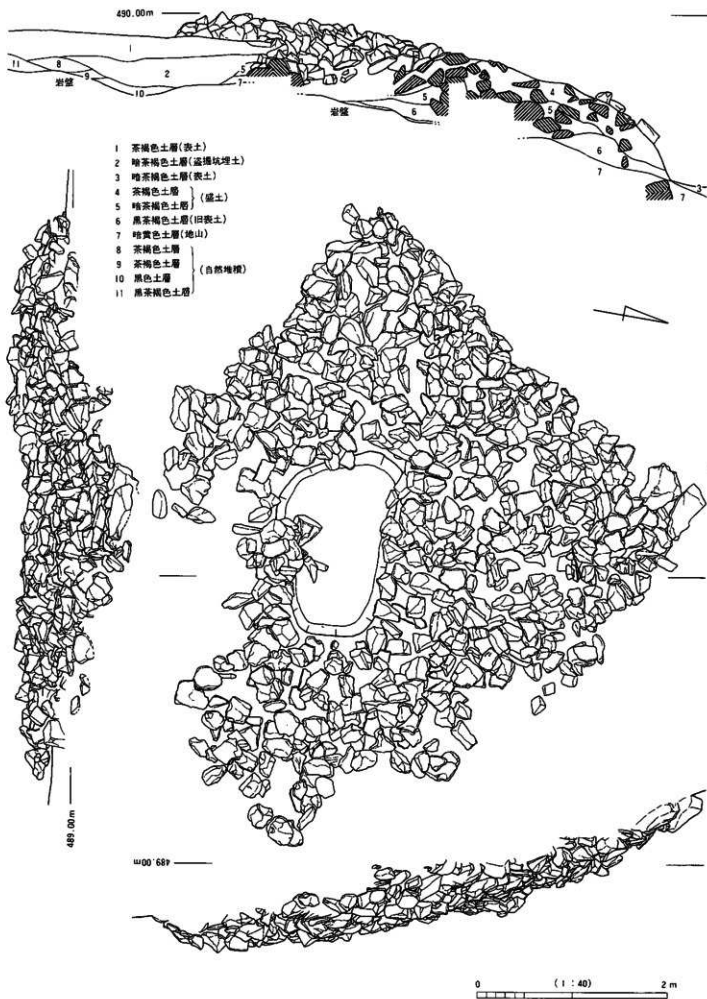
图版 7 14号填石室





19  
(1:6)

图版 9 4号集石





12号墳・4号集石  
(南から)



12号墳横穴式石室  
(南から)



13号墳全景  
(南東から)



13号墳石棺  
遺物出土状態  
(南東から)



14号墳横穴式石室  
遺物出土状態  
(南東から)



14号墳全景  
(南東から)



4号集石全景  
(南から)

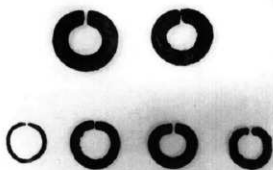
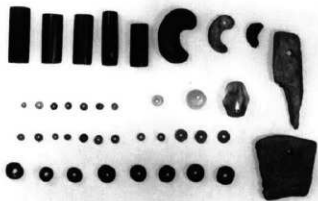
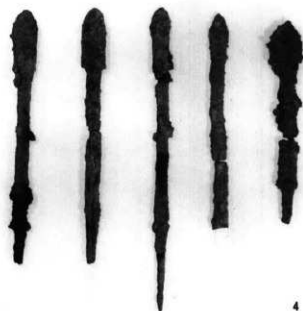
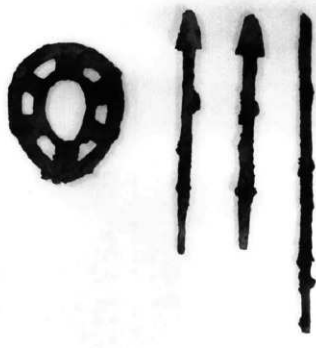


4号集石全景  
(北から)



左 61号石棺(北から)  
右 62号石棺(北東から)







(1~6 14号墳・7~8 4号集石 1~4- $\frac{1}{2}$  5- $\frac{1}{4}$  6- $\frac{1}{2}$  7-8 $\frac{1}{2}$ )





貼石帯整備工事  
(北東から)



古墳東側に設置  
した見学路  
(南から)



防災工事が完了した古墳  
直下の崩壊地  
(西から)

**森將軍塚古墳**—保存整備事業第8年次発掘調査概報—

---

発行日 平成元年3月31日

編集 森將軍塚古墳発掘調査団

発行 更埴市教育委員会

〒387 長野県更埴市大字杭瀬下84番地

TEL (0262) 73-1111

印刷 信毎書籍印刷株式会社

---

